

国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群

池尻大塚古墳



2015

関市教育委員会

目次

| | |
|----------------------------------|----|
| I 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 図1 池尻大塚古墳位置図(1/5,000) | |
| II 墳丘 | 3 |
| 1 第1次範囲確認調査 -各トレンチの様相と出土遺物- | |
| 図2 試掘坑配置図(1/250) | |
| 図3・4 北・西トレンチ 平・断面図(1/50)【折込み】 | |
| 図5 東トレンチ 平・断面図(1/50)【折込み】 | |
| 図6 羨道部拡張区・南トレンチ 平・断面図(1/50)【折込み】 | |
| 図7 使用石材(1/100) | |
| 表1 出土遺物 | |
| 図8 出土遺物(1/4) | |
| 2 第2次範囲確認調査 -各トレンチの様相と出土遺物- | |
| 図9 試掘坑配置図(1/300) | |
| 図10~16 A~Gトレンチ 平・断面図(1/50) | |
| 図17 出土遺物(1/4) | |
| 表2 出土遺物 | |
| III 石室 | 31 |
| 1 玄室 | |
| 図18 玄室完掘平面図(1/30) | |
| 図19 玄室土層断面図(1/50)【折込み】 | |
| 図20 石室実測図(1/50)【折込み】 | |
| 図21 墳丘・石室 縦・横断面図(1/100)【折込み】 | |
| 2 遺物 | |
| 図22 土器(1)・須恵器(2) 出土状況図(1/10) | |
| 表3 出土遺物 | |
| 図23 出土遺物1(1/4) | |
| 表4 鉄地金銅張飾金具 | |
| 図24~26 出土遺物2~4 鉄地金銅張飾金具(1/1) | |
| IV 自然科学分析 | 55 |
| 1 土器内面付着土の土壤選別・珪藻分析・元素マッピング分析 | |
| 表5~8 分析結果 | |
| 2 鉄地金銅張飾金具の蛍光X線マッピング分析 | |
| 表9 分析結果 | |
| 図27 元素マッピング分析結果 | |
| 3 鉄地金銅張飾金具に付着した木質の樹種同定と赤外分光分析 | |
| 表10, 11 分析結果 | |
| 図28 木質部の赤外吸収ベクトル | |
| V 今後の課題 | 65 |
| 1 石室の基準尺度 | |
| 図29 計測部位(1/200) | |
| 表12 共通尺の抽出 | |
| 図30 唐尺メッシュ(1/200) | |
| 図31 設計図の推定(1/100) | |
| 2 石室と墳丘 | |
| 図32 墳丘復元案(1/400) | |
| 図33 高麗尺 方70尺・35尺(1/800) | |
| 図34 字絵図と墳丘(1/800) | |
| 図35 石室主軸と墳丘の関係(1/800) | |
| 3 長良川流域の横穴式石室 -池尻大塚古墳の特徴と位置づけ- | |
| 図36 長良川中流域の横穴式石室を持つ古墳の分布 | |
| 表13 長良川中流域の横穴式石室を持つ古墳一覧 | |
| 表14 長良川中流域の大型横穴式石室 | |
| 図37 美濃地域の首長墳の分布 | |
| 表15 美濃地域の後期首長墳 | |
| 表16 美濃地域の横穴式石室編年 | |
| 4 地方豪族から律令官人へ | |
| 図38 美濃地域の方墳の分布 | |
| 図39 「不破の道」をめざした美濃勢 | |

I 調査に至る経緯と経過

池尻大塚古墳は、弥勒寺官衙遺跡群(弥勒寺跡、弥勒寺東遺跡)や弥勒寺西遺跡が背負う池尻山の支尾根の麓にあり、弥勒寺遺跡群の西端(関市池尻字東屋敷)に位置する。

保存に向けた取り組みの沿革 1996年(平成8)、弥勒寺東遺跡第3次調査を実施している最中に測量調査を実施した^{*1}。弥勒寺東遺跡では、前年までに正倉院の存在が明らかになり、この年は、郡庁院、館・厨院の発見と遺跡の範囲を確認することを目的に、遺跡全体に試掘坑を配して調査していた。弥勒寺東遺跡の官衙遺跡としての性格や様相が徐々に判明しつつあり、この地域の歴史解明の気運の高まりから、池尻大塚古墳の存在が自ずと浮かび上がってきたのである。

測量調査では、露出した石材の凶化及び墳丘は一辺の規模が22.4mの方墳と推定するに至った。池尻大塚古墳と弥勒寺跡や弥勒寺東遺跡を造営した氏族、すなわちムゲツ氏との関わりについて考えるきっかけとなる。

2002年(平成14)、関市円空館建設に伴う弥勒寺西遺跡の緊急発掘調査を実施した。郡衙の傍らで行われた祭祀の実体が明らかとなった。そこで、翌年の円空館開館に併せて、池尻大塚古墳も見学が可

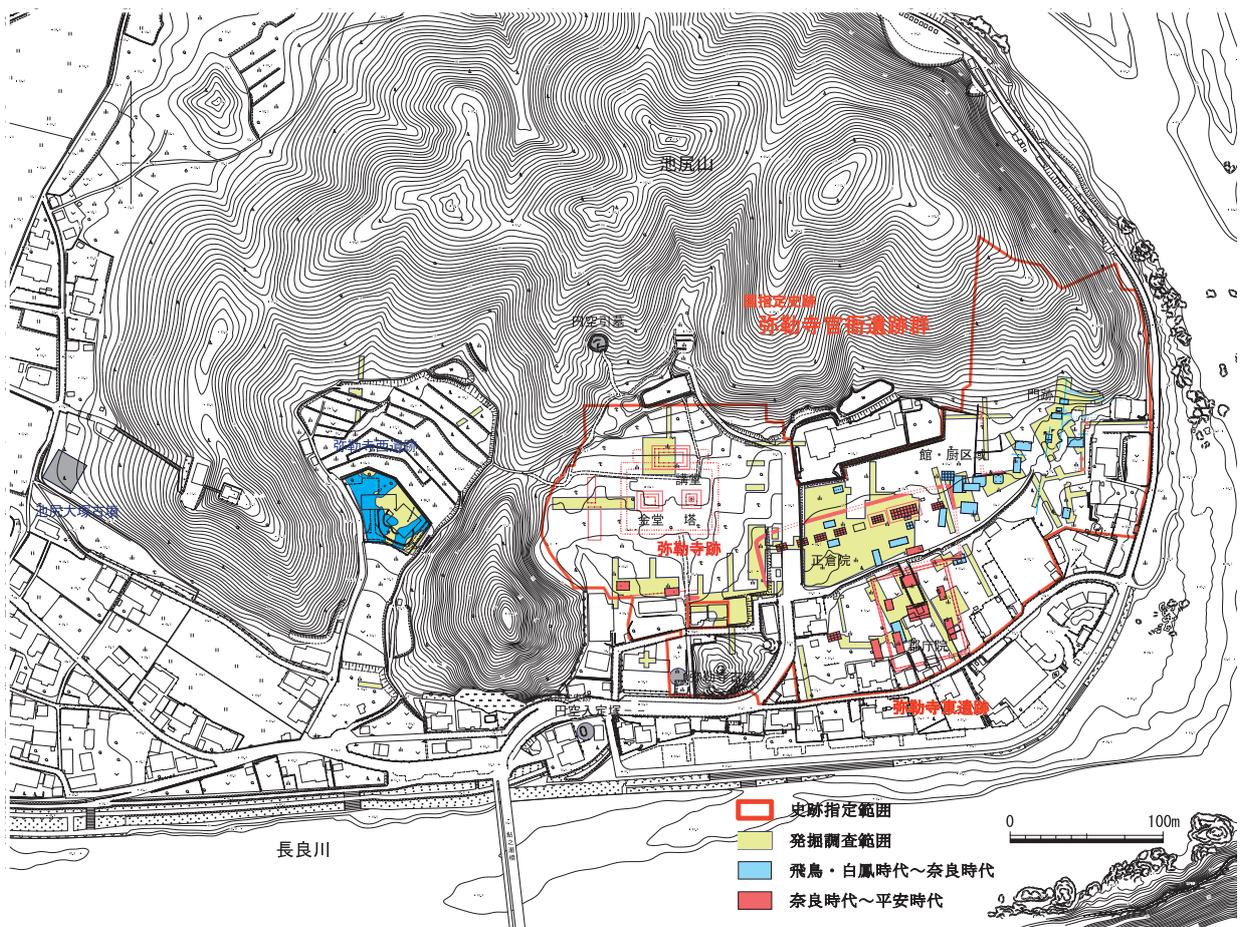


図1 池尻大塚古墳位置図 (S=1/5,000)

*1 田中弘志 1996「池尻大塚古墳測量報告」『美濃の考古学 創刊号』美濃の考古学刊行会

能な状態にすることを計画した。^{*1} ムゲツ氏の奥津城として弥勒寺遺跡群と一体で保護することを目指すことになる。

2005年(平成17)、文化庁主催「発掘された日本列島2005」に弥勒寺遺跡群出品。その時に付されたタイトルが「律令国家の成立過程と地方豪族の動向を物語る遺跡群－古墳・豪族居宅・寺院・官衙・祭祀遺跡－」。同年に開催された第1回弥勒寺遺跡群保存整備検討委員会では、弥勒寺東遺跡、弥勒寺西遺跡と共に池尻大塚古墳の追加指定を目指すことが確認された。

2007年(平成19)、弥勒寺東遺跡の追加指定が決定される。池尻大塚古墳は相続により所有者が変更することとなり、その保護措置が先決との判断から、第3回保存整備検討委員会において、弥勒寺西遺跡を後まわしにして、池尻大塚古墳の保護を優先し、範囲確認調査の実施が決定した。

2008年(平成20)、第1次(範囲確認)調査実施。残念ながら墳形の確定に至らず。また、築造時期を知る手掛かりが得られなかった。

2010年(平成22)、『保存管理計画書』を刊行。「弥勒寺官衙遺跡群と弥勒寺西遺跡及び池尻大塚古墳は、寺院、官衙、祭祀、古墳が不可分の関係で存在し、古代地方豪族の活動の全てを知ることができる。その特徴を最大限に活かす整備により、遺跡群が持つ本質的な価値を顕在化させる」と謳われた。

2011年(平成23)に、露出した石室石材の安全を確保することを目的に、第2次(墳丘の補足と石室内の)調査を実施することになる。

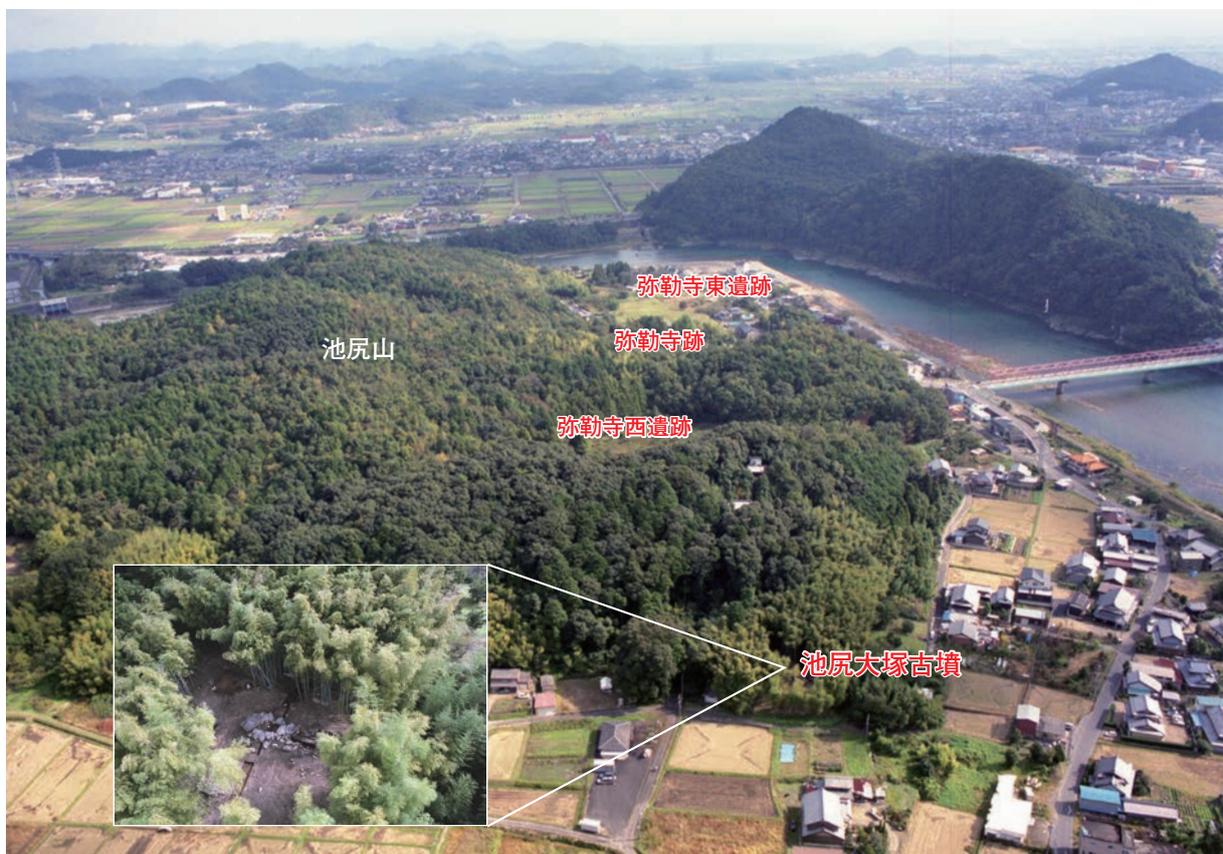


写真1 空撮 西から

*1 第1次範囲確認調査が実現した2008年に、ようやく見学可能な状態になった。

Ⅱ 墳丘

1 第1次範囲確認調査 —各トレンチの様相と出土遺物—

試掘坑の設定 露出した石室を手掛かりにその主軸を定め、それに沿うように北トレンチを設け、これに直交するラインに沿わせて東・西トレンチを設けた。東トレンチは天井石が失われた部分の石室内部まで^{*1}、西トレンチは石室西壁の背後まで延長した。

羨道部拡張区及び南トレンチは、当初主軸ラインの東側に沿うように設けていたトレンチを調査中盤に西側と南側(南トレンチ)に拡張し、調査終盤には羨道部の壁体から連続して左右(東西)に延びる石列を探るために、部分的に東西方向に拡張させた結果、変則的な形となった(図2)。

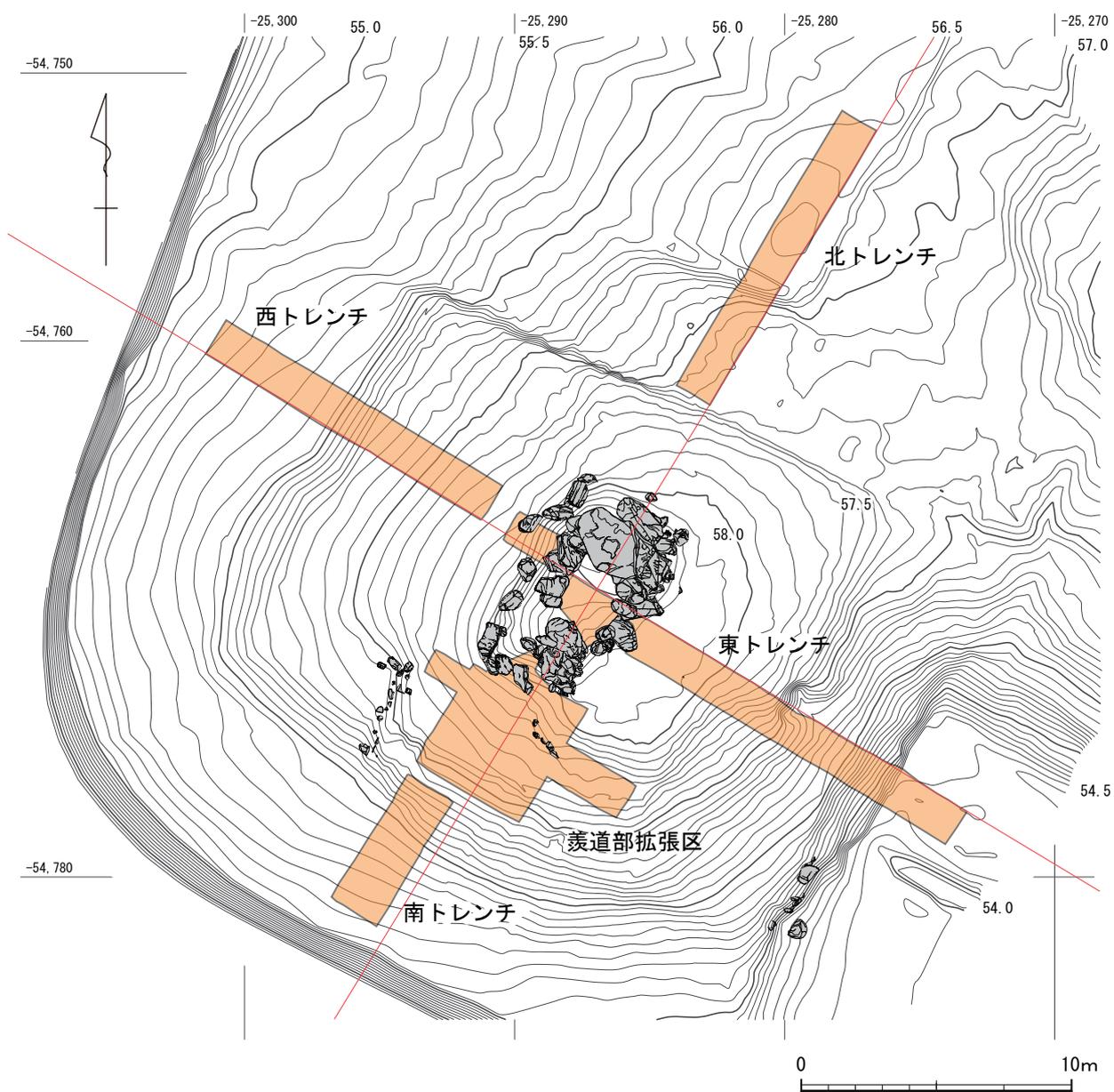


図2 試掘坑配置図 (S=1/250)

*1 基準線より南側の石室内(天井石を欠く部分)に流入した土砂を深さ90cmまで除去・清掃した。

各トレンチの様相



写真2 石室露出状況 北から



写真3 石室 上空から

北トレンチ 図3

設定の基準とした石室主軸とそれに直交するラインの交点(以下、原点^{*1}という)から北へ約8mの一段低くなった法尻から、主軸に東壁に沿わせて設けた幅1.5m、長さ12mの試掘坑である。

当初、基盤層(いわゆる地山)と思われた10層上面で精査した。竹の根の蔓延が著しく、発掘を停止したこの面が盛土の可能性も否定できないため、主軸側にさらに一段深い40cm幅のサブトレンチを設けて土層観察を試みた。11層はさらに下へ続くことが確認されたことから基盤層と認定されたが、7・10層の評価については未だに決着をみていない。



写真4 北トレンチ 南から

SD04 原点から北へ約13m地点の現況の筆境に溝状の窪み(竹の広がりを防ぐための溝)があり、これより先の一段低くなった部分では、トレンチの東壁に3.6m、西壁に1mの幅で接した窪み(SD04)が検出された。基盤層まで掘り込まれているが、時期、性格ともに不詳である。東側へ探索の範囲を広げて、さらに手掛かりを得る努力が必要である。したがって、古墳との関連性を論ずるには至らず、この遺構の性格を明らかにすることは今後の課題である。

墳端 7・10層が盛土か基盤層(地山)のいずれであろうとも、原点から約13m(現況の地境に一致する)地点でそれらが尽き、そこから北へは一段低くなっている。7・10層が盛土であればその限りを示し、基盤層(地山)であっても、そこから北側は削平されたことになる。したがって、墳端は▲で指し示した地点が候補となる点については、7・10層の評価に関わらず同じ結果となる。

*1 測量上の座標は、x = 24.0m, y = 25.0mである。

西トレンチ 図4

原点から5.0m西へ離れた地点から、石室主軸に直交する基準線に南壁を沿わせて設けた幅1.5m、長さ12mの試掘坑である。また、玄室壁体の背後に幅1.2mの拡張区^{*1}を設けた。



写真5 西トレンチ 東から

SD08 現状で把握される傾斜の変換点(見かけの墳端▲)から下方へ1.2m東の地点から、トレンチを横切る幅2.6mの溝状の遺構(SD08)を検出した。レンズ状の窪みで、深さは35cm程度(4・5層)。その外側に整地層(10・11層)と思われる土層があることから、周堤状のわずかな盛り上りが伴うことも想定される。いずれにしても範囲を広げるか、同じ斜面の離れた位置で確認する必要がある。

墓壙 玄室の背後に設けた拡張区では、標高約57.5mから基盤層を掘り込んだ墓壙^{*2}を確認した。壁体の背後から1.1m離れた地点から深さ30cm(水平距離60cm)までは緩やかに削られ、そこから深さ1.2mまで垂直に掘られている。壁体との間に確保された50cmの空間は、石室構築の初期段階において、



写真6 西トレンチ拡張区 北から

石材背後の作業坑として機能したと思われる。その間隙には、まず20~30cmの厚さで地山由来の土(10・11層)が充填され、これより上部は細かい単位(2~9層)で互層状に盛土されている。石室構築と直接関わる土層である。5→6→8→7→6→4層の順で盛土を施しながら墓壙と同じ高さ(57.5m)まで石室を構築した後、石材を一段積み毎に6→5→4層という同じ層順の単位が2度繰り返され、墳丘側へ斜めに積み重ねられている様子が確認できた。

一方、石室構築に関わる盛土から連続する墳丘側の盛土は確認されなかったが、石室側で盛土直下に確認された旧表土(8層)がトレンチの東端から1.8m(石室主軸から6.8m)の地点まで確認された。少なくとも▲で示した地点まで、その上部に盛土が施されていたことを示している。

墳端 これより下方の基盤層の傾斜がやや急な斜面に変換する位置で6・7層が認められたが、盛土である確証はない。しかしながら、墳端は、その外側で傾斜が水平に変換する地点(▲で示した位置)を想定しておく。

*1 崩落した石室石材を避けたため、基準線から20cm南に偏した位置となっている。

*2 第2次調査において、墓壙が穿たれた高さを反映した目地が水平に通ることを石室内側から確認した。

Ⅲ石室 1玄室「墓壙内の石積工」p.37

北トレンチ a-a'

- 1 10YR3/3暗褐色レキ混細砂質シルト 全体にφ~5mm礫含む しまり○ 竹根◎【表土】
- 2 10YR3/4暗褐色細砂質シルト：10YR4/4褐色細砂質シルト 6:4 しまり○ 竹根◎【漸移層か】
- 3 10YR2/3黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【漸移層】
- 4 10YR3/3暗褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【SD04埋土か】
- 5 10YR3/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根△【SD04埋土】
- 6 10YR3/4暗褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【落ちこみ 土坑か】
- 7 10YR4/6褐色細砂質シルト しまり◎ 竹根△【盛土か 基盤層か 評価が分かれる】
- 8 7.5YR3/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【4を切る浅い土坑 カクランか】
- 9 10YR3/4暗褐色細砂質シルト しまり○ 竹根△【根によるカクランか もしくはpit】
- 10 7.5YR4/4褐色細砂質シルト しまり◎ 竹根△【盛土か 基盤層か 評価が分かれる】
- 11 10YR4/6褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根△【基盤層】

- 〈凡例〉
- しまり ◎ よくしまる
○ ややしまる
△ ややゆるい
× ゆるい
- 竹根 ◎ 多い
○ やや多い
△ 少ない
× ほとんどない

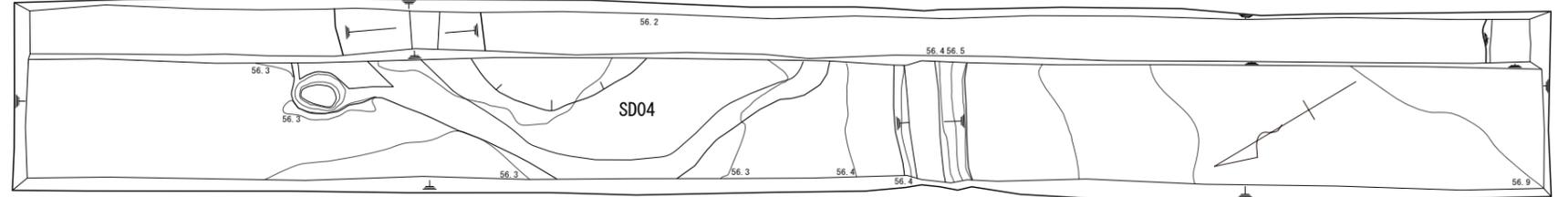
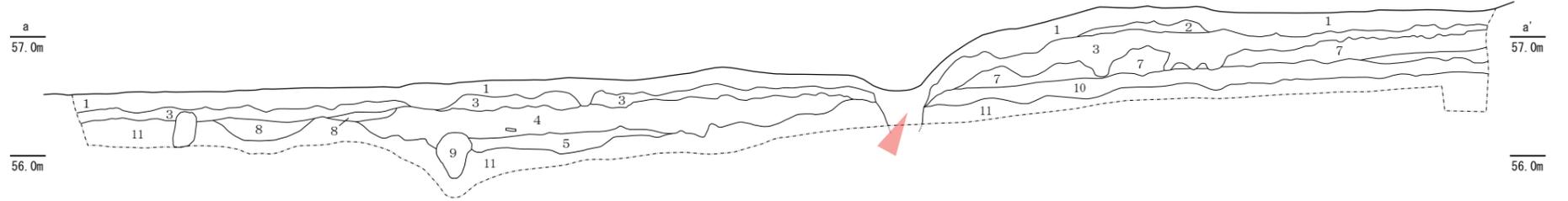
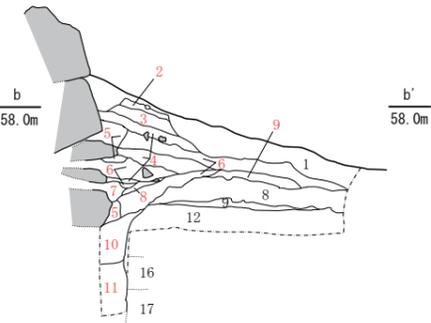
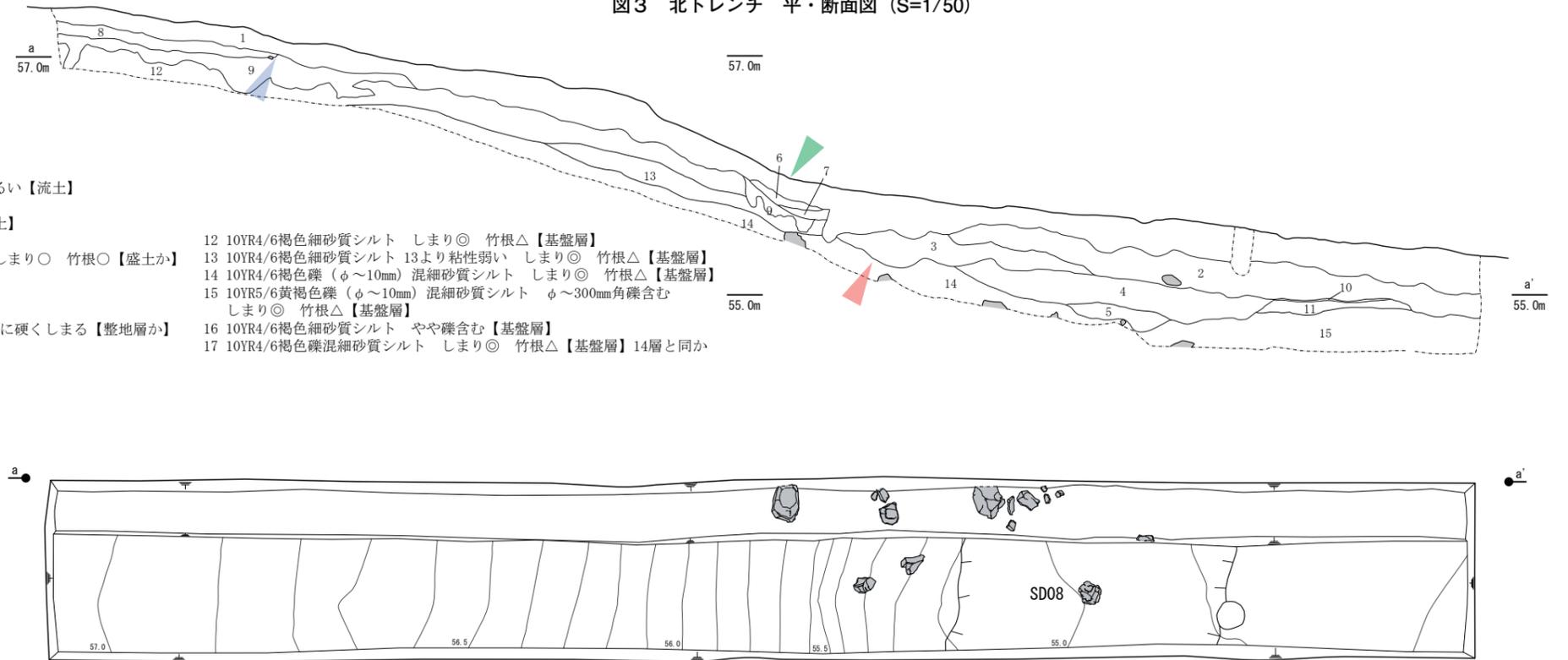
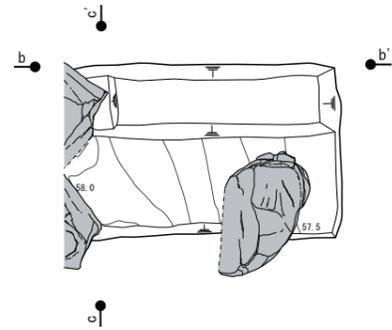
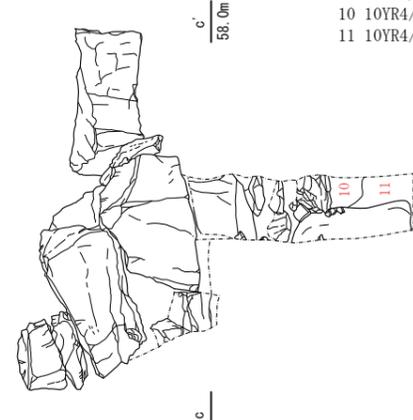


図3 北トレンチ 平・断面図 (S=1/50)



西トレンチ a-a'

- 1 10YR2/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【表土】
- 2 10YR2/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎ 表土よりやや明るい【流土】
- 3 10YR3/4暗褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【流土】
- 4 10YR3/3~3/4暗褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【溝SD08埋土】
- 5 10YR3/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根△【溝SD08埋土】
- 6 10YR4/6褐色細砂質シルト：10YR3/2黒褐色細砂質シルト 6:4 しまり○ 竹根◎【盛土か】
- 7 10YR3/2黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【盛土か】
- 8 10YR2/1黒色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【旧表土】
- 9 10YR2/3黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根◎【漸移層】
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根△ 非常に硬くしまる【整地層か】
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根◎【整地層か】
- 12 10YR4/6褐色細砂質シルト しまり◎ 竹根△【基盤層】
- 13 10YR4/6褐色細砂質シルト 13より粘性弱い しまり◎ 竹根△【基盤層】
- 14 10YR4/6褐色礫 (φ~10mm) 混細砂質シルト しまり◎ 竹根△【基盤層】
- 15 10YR5/6黄褐色礫 (φ~10mm) 混細砂質シルト φ~300mm角礫含む しまり◎ 竹根△【基盤層】
- 16 10YR4/6褐色細砂質シルト やや礫含む【基盤層】
- 17 10YR4/6褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根△【基盤層】 14層と同一



拡張区 b-b'

石室構築関連

- 2 10YR2/2黒褐色礫混細砂質シルト：7.5Y4/6褐色礫混細砂質シルト 6:4 しまり◎ 竹根◎【盛土】
- 3 10YR2/2黒褐色礫混細砂質シルト しまり○ 竹根◎【盛土】
- 4 7.5YR4/6褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根△【盛土】
- 5 10YR2/2黒褐色細砂質シルト しまり△【盛土】
- 6 7.5YR4/4褐色礫混細砂質シルト しまり◎ 竹根△【盛土】
- 7 5に7.5YR4/4褐色細砂質シルト塊少量混 8:2【盛土】
- 8 4に10YR2/2 黒褐色細砂質シルト塊混 6:4【盛土】
- 9 10YR2/3黒褐色細砂質シルト しまり○ 竹根△【盛土】
- 10 10YR3/4暗褐色細砂質シルト：10YR4/6褐色細砂質シルト塊 6:4 しまり○ 竹根×【石室掘方埋土】
- 11 10YR4/6褐色細砂質シルト：10YR3/4暗褐色細砂質シルト塊 8:2 しまり○ 竹根×【石室掘方埋土】

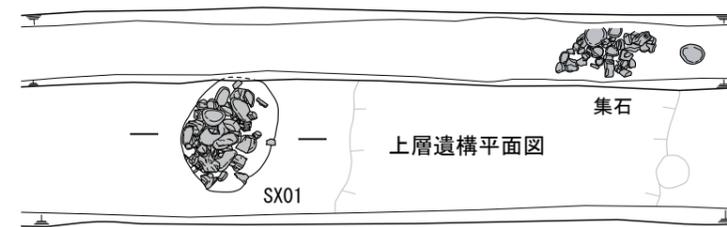
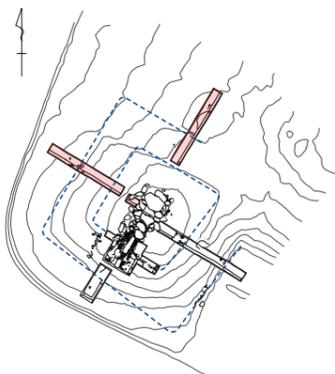


図4 西トレンチ 平・断面図 (S=1/50)



集石土坑 なお、トレンチ中ほどで3層(流土)から基盤層(13・14層)を掘り込んだ長径80cm、短径60cm、深さ20cmの集石土坑(SX01)を検出した。流土(2・3層)から山茶碗が出土したことから、中世以降に穿たれた遺構と考えられる。さらに2.5m西にも同様の集石遺構があった。

東トレンチ 図5

石室壁体の背後から主軸に直交する基準線に北壁を沿わせて設けた幅1.5m、長さ14mの試掘坑である。墳丘の中で最も比高差が(現況の地面で約4m)あり、急な斜面である。

墳丘裾の傾斜が水平に変換する地点で、川原石が認められた。大きさから土留めの役割は考え難いが、盛土を施す際の目印になった可能性がある。因みに、このトレンチより少し南方の同じ位置で、長径1m弱の大きめの石(石室と同じ硬質砂岩)が露出している箇所がある。盛土と墳丘裾の石の関係を明らかにすることが課題である。

一方、墳頂部の緩やかな傾斜が急な傾斜に切り替わる(石室の背後から約3mの)地点で、盛土に埋没した川原石が現れたため、この続きと盛土との関係を把握するために、この部分を2m幅で掘り下げた。北壁の断面(b-b')では、この石が初期の盛土15-2層を押さえている様子が明らかとなった。南壁寄りの等高線に直角、すなわちフォールライン上に列をなす部分は、墳丘外に排水を促すための暗渠の役割があるのではないかと思われたが、トレンチの幅では石群は散漫な状態である。これが広範囲で見れば等高線に沿って列



写真7 東トレンチ下 西から



写真8 東トレンチ上 旧表土と初期盛土

をなす可能性も否めない。また、石室羨道部の壁体から連続して左右(東西)に分かれて延びる石列とほぼ同じ、標高57.1~57.4mに分布することから、或いは2段目の構築に関連する可能性がある。

墳端 このトレンチの北壁は、墳丘斜面上に穿たれた現代の攪乱坑(竹炭の窯跡)にかかるため、断面図は南壁(基準線より1.5m南に偏したライン)を示した。1~3層は表土及び流土、4~20層が盛土と見なされる。それが尽きるところの法尻(▲で示した位置)を墳端とした。この案は、現況の傾斜変換点と一致する。4~17層は、元の地面の傾斜なりに貼り付けたような状況を示すが、墳丘裾の18~20層は水平に施されている。1段目の外側斜面を形成するために、地山を約2mの幅で水平に削り出したところへ積み上げた、初期の盛土と考えられる。

なお、f・g層(SD11「溝か」)については後述する。^{*1}

*1 II墳丘 2第2次範囲確認調査「Bトレンチ」p.21



写真9 羨道部拡張区



写真10 南トレンチ 北から



写真11 羨道部拡張区 閉塞の状況 南から

羨道部拡張区は最終的に変則的な形となった。当初は羨道部に残る天井石を避けて、石室主軸ラインに西壁が沿うように南へ幅2m、長さ4.9mのトレンチを設けたが、調査中盤に2.5m西側へ範囲を広げた^{*1}。また、羨道の中ほどに面を正面に向けて積まれた石材が東西両壁にあり、その先が外側へ続くことから^{*2}、発掘区を東へ幅1.4m、長さ3m、西へ幅1m、長さ1.4m拡張して、その行方を追った。

南トレンチは、羨道部拡張区の西側を基準に、南へ幅2m、長さ5.4m延長した形になっている^{*3}。

羨道の西壁は石室主軸と平行、すなわち玄室と同じ方向にまっすぐ延びるのに対して、東壁は南基準で13°ほど西へ開いていくことが判った^{*4}。

閉塞施設 特筆すべきは、玄室に向かって川原石が円錐形に積み上げられた閉塞施設が良好に残存していたことである。上部の崩れは認められるが、裾部は半径約2mの弧を描き、下半部は元の状態を保っている。

石列 羨道部壁体の途中から連続して東西に分かれて延びていくと見られた石列は、東側の拡張した範囲では石列、西側ではその抜け跡を検出することができた。さらにこの先で角を成すことが予想され、また東西の辺に回り込むのかなど、墳形や上段の規模に関わる情報を得ることが次の課題となった^{*5}。

*1 築造時期を決定付ける出土遺物に恵まれなかったことから、羨道部の調査を徹底することになったため。

*2 この石列の一部は既に表面に露出しており、築成段との関わりが指摘されていた。p.1 *1

*3 このため、羨道部拡張区から南トレンチにかけての断面図は、石室主軸より50cm西に偏した位置になっている。

*4 玄室と羨道の主軸のずれは、第2次調査において、玄門立柱石から見られた。Ⅲ石室 1玄室「玄門」p.40

*5 Ⅱ墳丘 2 第2次範囲確認調査「C・Eトレンチ」p.22, 25

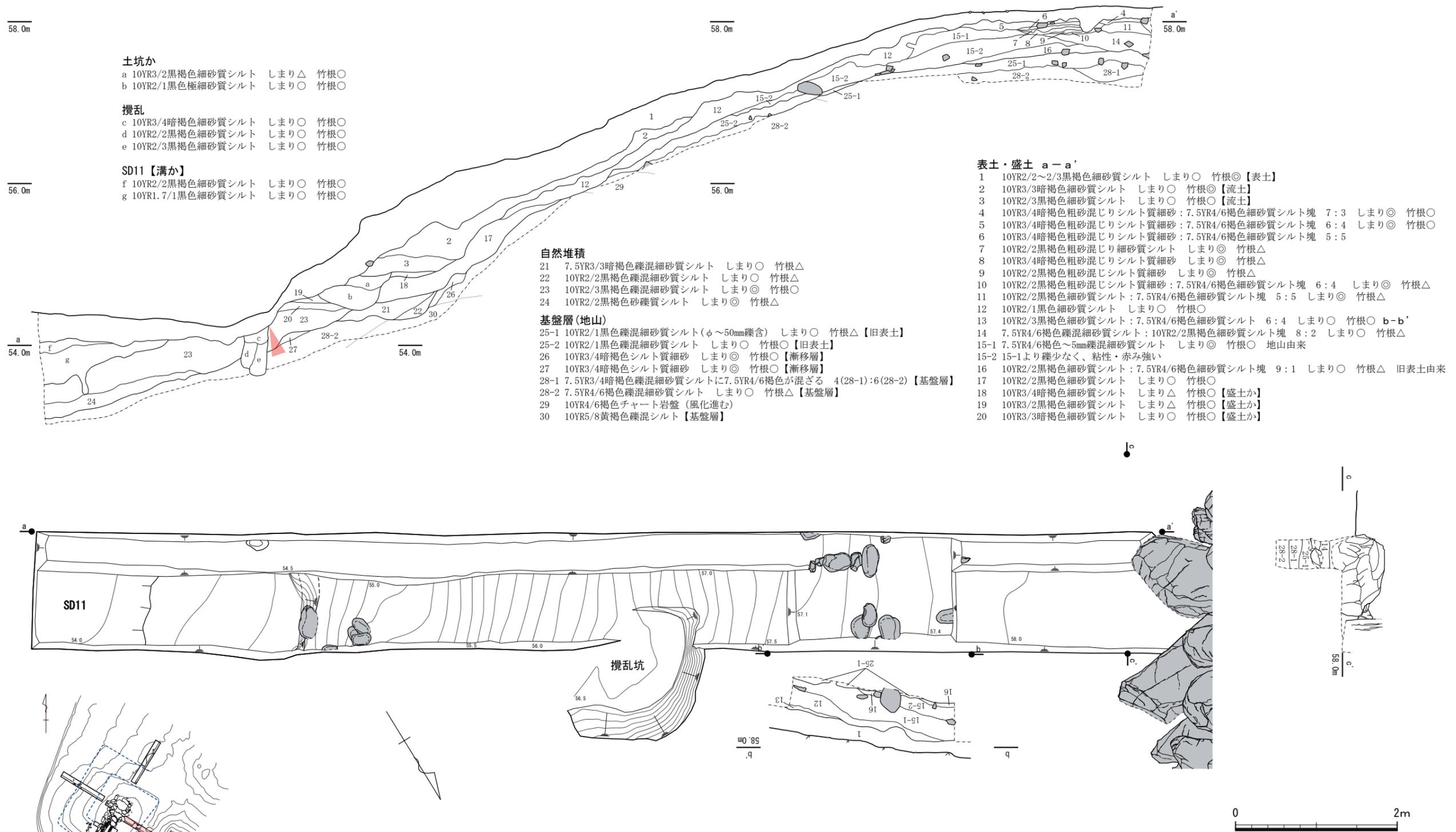


図5 東トレンチ 平・断面図 (S=1/50)

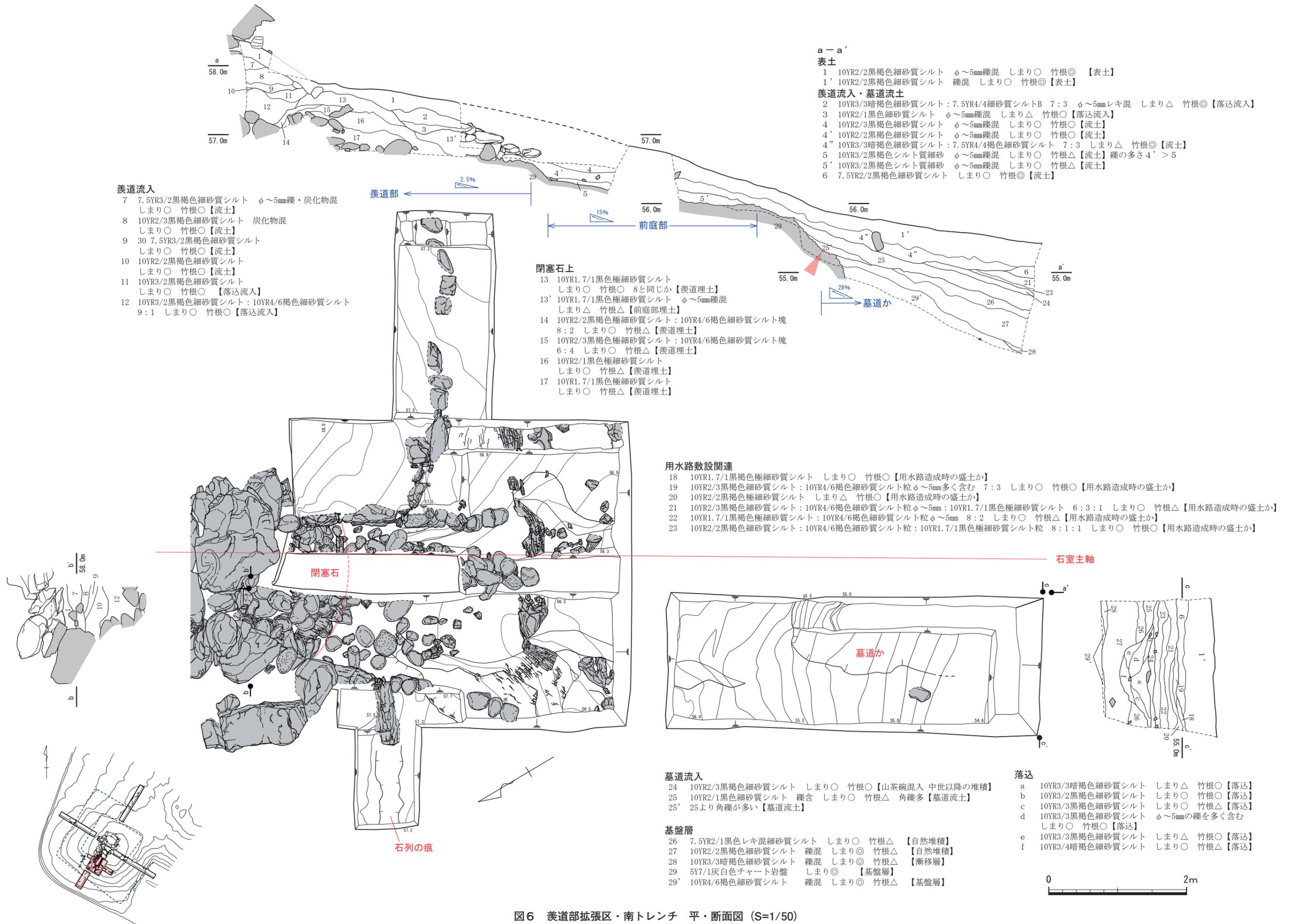


図6 羨道部拡張区・南トレンチ 平・断面図 (S=1/50)

羨道部・前庭部・墓道の勾配 羨道部から前庭部にかけての床面には、削って整えられたと思われる岩盤が現れた。羨道部は緩やかで2.5% (56.7-56.6 / 4.0m)の勾配であり、壁体の石材が尽きるところで25cmの段差がある。ここから前庭部にかけては15% (56.35-55.9 / 3.0m)の勾配となり、その先で今度は55cmの段差がある。岩盤はここで地山に潜り込んでいくことを確認した。この段差は自然の下がりである。



写真12 東へ延びる石列

これより先は、礫混じりの黒褐色土(25層)が下方に向かって溝状にはまり込んでいた。墓道の可能性がある。ここは28% (55.30-54.45 / 3.0m)の勾配である。すなわち墓道か(28%)→前庭部(15%)→羨道部(2.5%)へと段差を境に勾配を減じ、玄門に至る構造になっている。

墳端 25'層は岩盤が風化して剥落した、いわゆる「くされ礫」が溜まった土層であり、この溝状の遺構(墓道か)への初期の流入と考えられる。26~29層は基盤層(地山)である。したがって、25'層が沿う岩盤斜面の法尻(▲で示した位置)を墳端と考えた。

南トレンチの先は、著しく地形の改変を受けている。18~23層は、直ぐ下に敷設された用水路を守る法面を養生するための現代の盛土と考えられる。



写真13 調査風景 着手直後

使用石材 石室に主に使用されている石材は硬質砂岩(美濃帯)^{*1}である。ここより少し上流で長良川右岸の池尻山東麓に露頭がある。地元では「石屋石」と呼ばれ、現代まで石を扱う業者の石切場があった。弥勒寺跡の堂宇の礎石、弥勒寺東遺跡の正倉の礎石にも同じ石材が用いられている。

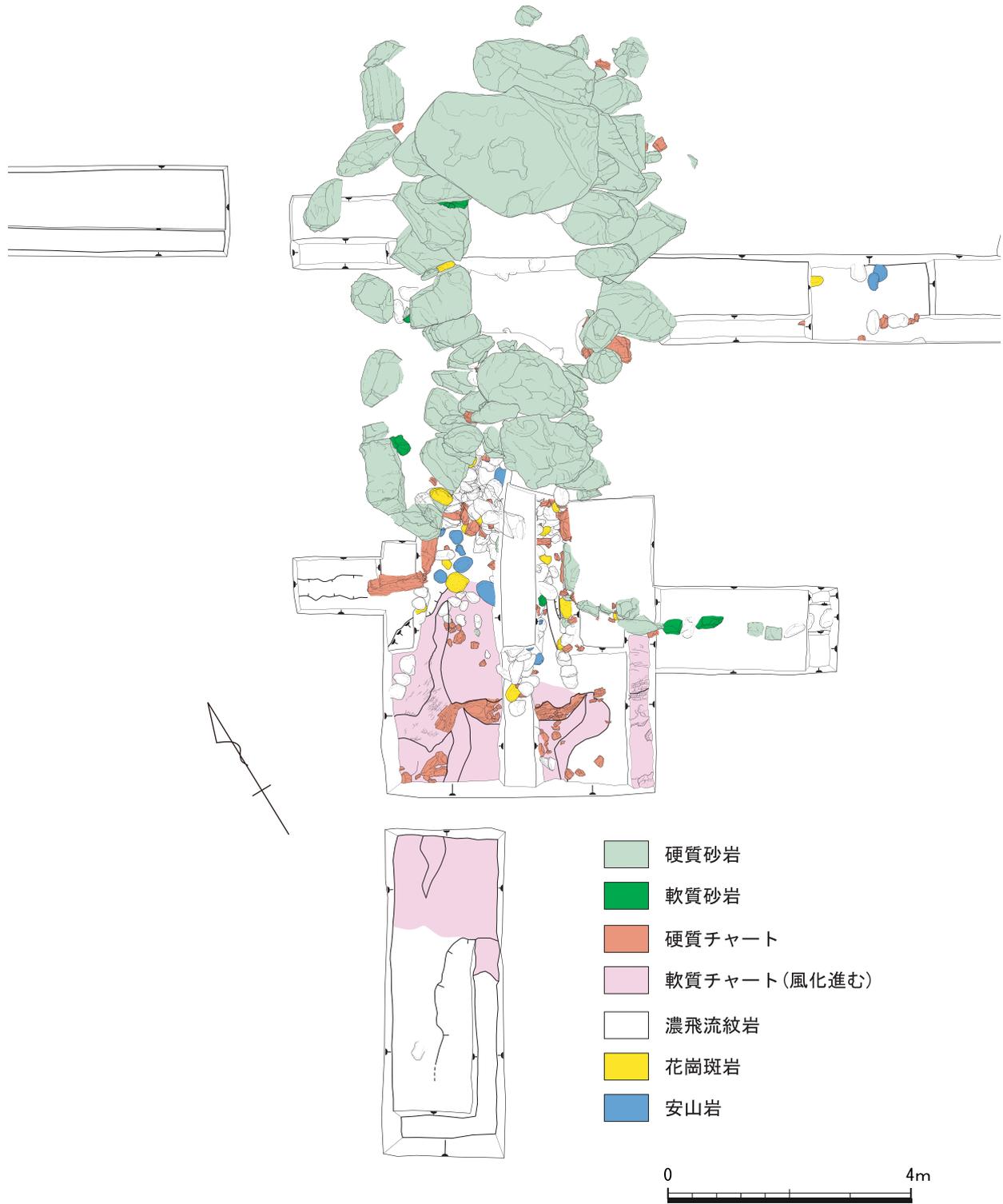


図7 使用石材 (S=1/100)

*1 石材の種類は、鹿野勘次氏のご教示による。

出土遺物 縄文時代から近世にかけての遺物が出土した。須恵器は、細片が多く詳細な時期判定は困難だが、概ね古墳時代後期から奈良時代のものである。残念ながら古墳の築造時期を直接知る手掛かりはつかめなかった。そのほかは、縄文土器や弥生土器の小片、灰釉陶器、中・近世陶器が出土した。

北トレンチ(1,2) (1)は、須恵器瓶の頸部である。頸部と体部の境に段を持つ。窪みSD04の上面から出土した。奈良時代後半ごろのものか。(2)は、狐面を型押しした泥面子である。トレンチ北端の表土～漸移層で出土した。江戸時代の玩具と思われる。

西トレンチ(3~12) (3,6,8,10,11)は溝状の遺構SD08上面から出土、(5)は表土～流土、(4,7,9,12)は流土から出土した。(3)は、須恵器坏。底部外側に低くつぶれた形状の高台が貼り付けられている。(4,5)は、須恵器の盤か。(5)の口縁端部は外傾する面をもつ。(6)は、須恵器甕の体部片。外面に平行タタキが施され、内面の当具痕はナデ消されているが、平行文が薄く確認できる。(7)は、中世陶器鉢の口縁部で、口縁内側は浅く窪み段をなす。(8)は、山茶碗の口縁部。薄いつくりで口縁はわずかに外反する。大畑大洞4号窯式新段階に並行する室町時代のものと思われる。(9)は、山皿。大畑大洞4号窯式に並行する鎌倉時代のものと思われる。(10)は、土師器小皿で、底部に指押さえが見られる。(11)は、鉄製刀子で、切先は欠損する。(12)は、体部内外面に灰釉が施された近世陶器丸碗で、高台は削り出され、底部外面に落款が押印される。連房第5小期の江戸時代中期の所産と思われる。

東トレンチ(13,14) (13)は、SD11(溝^{*1})上層から出土した。口縁内側に面を持ち、指頭によると思われる円形の刺突が施される。縄文晩期の深鉢か。(14)は、土坑状の落ち込みから出土した山皿。大畑大洞4号窯式並行の鎌倉時代のものと思われる。

羨道部拡張区(15~23) (15,18)は墳丘盛土、(16)は前庭部床面、(17)は羨道埋土、(19,20)は前庭部埋土、(21)は落ち込み埋土、(22,23)は表土から出土した。(15,16)は、チャートの剥片。(17)は、外面に縄文が施される。縄文土器深鉢の体部片か。(18)は、外面に条痕が施される弥生土器深鉢か。(19)は、土師器甕。口縁端部は上方につまみあげられる、いわゆる南伊勢型の甕である。(20,21)は、須恵器壺類の体部片か。(20)の上方にはカキメが施される。(22)は、山茶碗で、形骸化した高台は底部周縁より内側に貼り付けられ、刳殻痕がみられる。体部の立ち上がりは弱く扁平化が進んでいる。大洞東1号窯式に並行する室町時代のものと思われる。(23)は、連房期播鉢の破片の側縁を打ち欠き、円形に2次加工された円盤。

南トレンチ(24~26) 表土から出土した。(24)は、須恵器甕の体部片。外面は平行タタキ後にカキメを施し、内面は同心円当具痕が見られる。(25)は、H72号窯式に並行する灰釉陶器深碗か。平安後期のものと思われる。(26)は、山皿。大畑大洞4号窯式に並行する鎌倉時代のものと思われる。

東トレンチ石室内(27~29) (27,28)は玄室埋土から、(29)は表土から出土した。(27)は、土師器甕の口縁部。口縁部外面は浅く窪む面を持ち、端部は上方につまみあげられる、南伊勢型の甕である。

(28)は、土師器小皿。底部は指押さえ、口縁端部はヨコナデされる。(29)は、板状の鉄製品。断面は片側が薄くなり刃部のようにになっている。

*1 第2次範囲確認調査で、「溝」説は否定された。Ⅱ墳丘 2 第2次範囲確認調査「Bトレンチ」p.21

石室周辺表土(30~32) (30~32)は石室周辺の清掃時に採集した。(30)は、外面に縄文が施される。縄文土器深鉢の体部片か。(31)は、須恵器盤か。細く高い高台。(32)は、須恵器坏で、高台は底部外側に貼り付けられ、接地面中央に浅い沈線がめぐる。底部外面には螺旋状のヘラ記号が見られる。

表面採集(33) (33)は、須恵器甕の体部片で、外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕が見られる。古墳の南部で表面採集した。

排土(34~37) (34~37)は排土から回収した。(34)は、須恵器の器台か。2条の沈線が廻る。(35)は、灰釉陶器の小碗。丸みを帯びた三角形の高台を持つ。H72号窯式に並行する平安時代後期のものと思われる。(36)は、須恵器甕の体部。外面に平行タタキ、内面に同心円当具痕が見られる。(37)は、須恵器盤か。堅緻な焼成、胎土である。

表1 出土遺物

| 番号 | 種別 | 器種 | 調査区名 | 遺構名 | 調整・技法の特徴等 | 口径・長 (mm) | 底径・幅 (mm) | 器高・厚 (mm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|----|------|------|--------|--------|----------------------|--------------|--------------|--------------|----------|-----|-----|---------------|-----------------------|
| 1 | 須恵器 | 瓶 | 北トレンチ | SD04上面 | 回転ナデ・穿孔・頸部貼付 | — | — | [29] | 頸部 | 密 | 硬 | 灰黄2.5Y7/2 | |
| 2 | 土製品 | 泥面子 | 北トレンチ | 表土~漸移層 | 弧面を型押し | 長[40] | 幅[32] | 厚6 | — | 密 | 並 | にぶい橙7.5YR7/4 | |
| 3 | 須恵器 | 坏 | 西トレンチ | SD08上面 | 回転ナデ・回転ケズリ・貼付高台 | — | (74) | [13] | 底3/12 | 密 | 並 | 暗灰黄2.5Y5/2 | |
| 4 | 須恵器 | 盤 | 西トレンチ | 崩落土 | 回転ナデ | (142) | — | [20] | 口1/12 | 密 | 並 | 浅黄2.5Y7/3 | |
| 5 | 須恵器 | 盤 | 西トレンチ | 表土~崩落土 | 回転ナデ | (207) | — | [22] | 口1.3/12 | 密 | 並 | 黄灰2.5Y6/1 | |
| 6 | 須恵器 | 甕 | 西トレンチ | SD08上面 | 平行タタキ・平行当具痕・ナデ消し | 長[90] | 幅[58] | 厚11 | — | 密 | 並 | 黄灰2.5Y7/2 | |
| 7 | 中世陶器 | 鉢 | 西トレンチ | 崩落土 | 回転ナデ | — | — | [19] | 口1/12以下 | 密 | 並 | 黄灰2.5Y5/1 | 1~3mm砂粒含む |
| 8 | 中世陶器 | 山茶碗 | 西トレンチ | SD08上面 | 回転ナデ | (137) | — | [22] | 口1.3/12 | 密 | 並 | 黄灰2.5N6/1 | |
| 9 | 中世陶器 | 山皿 | 西トレンチ | 崩落土 | 回転ナデ・回転糸切 | (88) | (36) | [17] | 口2.2/12 | 密 | 並 | 淡黄2.5Y8/3 | |
| 10 | 土師器 | 小皿 | 西トレンチ | SD08上面 | ユビオサエ | (70) | — | 14 | 底12/12 | 密 | 軟 | 浅黄褐10YR8/3 | |
| 11 | 鉄製品 | 刀子 | 西トレンチ | SD08上面 | | 長[50] | 幅[14] | 厚6 | — | — | — | — | |
| 12 | 近世陶器 | 丸碗 | 西トレンチ | 崩落土 | 回転ナデ・削出高台・白色釉 | (108) | (54) | [66] | 底5/12 | 密 | 並 | 灰白2.5Y8/2 | 底部に刻書 |
| 13 | 縄文土器 | 深鉢 | 東トレンチ | SD11上層 | 口縁部に円形の刺突 | (137) | — | [18] | 口1/12 | 密 | やや軟 | 浅黄7.5YR7/4 | 晩期か |
| 14 | 中世陶器 | 山皿 | 東トレンチ | 土坑状の落込 | 回転ナデ・回転糸切 | — | (50) | [7] | 底5/12 | 密 | やや硬 | 灰白2.5Y7/2 | |
| 15 | 石器 | 剥片 | 羨道部拡張区 | 東拡張区盛土 | チャート | 長22 | 幅15 | 厚7 | — | — | — | 灰N4.5/(B) | |
| 16 | 石器 | 剥片 | 羨道部拡張区 | 前庭部床面 | チャート | 長21.5 | 幅30.5 | 厚9.5 | — | — | — | 灰N4/(B) | |
| 17 | 縄文土器 | 深鉢か | 羨道部拡張区 | 羨道埋土 | 縄文 | 長[35] | 幅[32] | 厚6 | — | やや粗 | やや軟 | にぶい黄褐10YR7/2 | |
| 18 | 弥生土器 | 深鉢か | 羨道部拡張区 | 盛土 | 条痕 | 長[26] | 幅[25] | 厚6 | — | やや粗 | やや軟 | にぶい黄褐7.5YR3/4 | |
| 19 | 土師器 | 甕 | 羨道部拡張区 | 前庭部埋土 | ヨコナデ | (192) | — | [32] | 口1/12 | 密 | やや軟 | にぶい褐7.5YR6/3 | |
| 20 | 須恵器 | 壺か | 羨道部拡張区 | 前庭部埋土 | 回転ナデ・カキ目・自然釉 | — | — | [35] | 肩1/12以下 | 密 | やや硬 | 暗灰N3/(B) | |
| 21 | 須恵器 | 壺か | 羨道部拡張区 | 落ち込み埋土 | 回転ナデ | — | — | [37] | 肩1/12以下 | 密 | やや軟 | 灰黄2.5Y6/2 | |
| 22 | 中世陶器 | 山茶碗 | 羨道部拡張区 | 表土 | 回転ナデ・回転糸切・貼付高台・モミガラ痕 | — | (54) | [15] | 底2/12 | 密 | 並 | 灰黄2.5Y6/2 | |
| 23 | 近世陶器 | 加工円盤 | 羨道部拡張区 | 表土 | 側縁調整 | 長51 | 幅49 | 厚10 | — | 密 | 並 | にぶい赤橙5YR4/4 | 瀬戸美濃連房搦鉢 |
| 24 | 須恵器 | 甕 | 南トレンチ | 表土 | 平行タタキ・カキ目・同心円当具痕 | 長[55] | 幅[45] | 厚6 | — | 密 | 並 | 黄灰2.5Y6/1 | |
| 25 | 灰釉陶器 | 深碗 | 南トレンチ | 表土 | 回転ナデ・回転ケズリ・貼付高台 | — | (90) | [18] | 底2/12 | 密 | やや硬 | 灰白10YR7/1 | |
| 26 | 中世陶器 | 山皿 | 南トレンチ | 表土 | 回転ナデ・回転糸切 | (77) | (47) | [12] | 口2.5/12 | 密 | やや硬 | 灰黄2.5Y6/2 | |
| 27 | 土師器 | 甕 | 石室内 | 玄室埋土 | ヨコナデ | — | — | [40] | — | 密 | 硬 | 明黄褐10YR7/6 | |
| 28 | 土師器 | 小皿 | 石室内 | 玄室埋土 | ユビオサエ・ヨコナデ | (74) | — | [12] | 口1.3/12 | 密 | 並 | 明黄褐10YR7/6 | |
| 29 | 鉄製品 | 板状 | 石室内 | 表土 | | 長[137] | 幅[50] | 厚[8] | — | — | — | — | |
| 30 | 縄文土器 | 深鉢か | — | 表土 | 縄文 | 長[57] | 幅[50] | 厚8 | — | やや粗 | やや軟 | にぶい黄褐10YR5/3 | |
| 31 | 須恵器 | 盤か | 羨道西 | 表土 | 回転ナデ | — | (143) | [16] | 高台1/12以下 | 密 | 並 | 暗灰黄2.5Y5/2 | |
| 32 | 須恵器 | 坏 | 羨道西 | 表土 | 回転ナデ・回転ケズリ・貼付高台 | — | (74) | [10] | 底4/12 | 密 | 並 | にぶい黄橙10YR6/3 | 底部外面ラセン状のヘラ記号・高台接地面沈線 |
| 33 | 須恵器 | 甕 | 南表面採集 | — | 平行タタキ・同心円当具痕 | 長[65] | 幅[63] | 厚10 | — | やや密 | 並 | 灰白10YR7/1 | |
| 34 | 須恵器 | 器台か | 北東排土 | — | 回転ナデ・沈線 | — | (192) | [32] | 底1/12 | 密 | 並 | 灰5Y5/1 | |
| 35 | 灰釉陶器 | 小碗 | 東排土 | — | 回転ナデ・回転糸切・貼付高台 | — | (59) | [17] | 底6/12 | 密 | やや軟 | 灰白2.5Y8/2 | |
| 36 | 須恵器 | 甕 | 南東排土 | — | 平行タタキ・同心円当具痕 | 長[61] | 幅[45] | 厚8 | — | 密 | 並 | 灰白10YR7/1 | |
| 37 | 須恵器 | 盤か | 南東排土 | — | 回転ナデ | — | — | [25] | 口1/12以下 | 密 | 硬 | 灰黄褐10YR4/2 | |

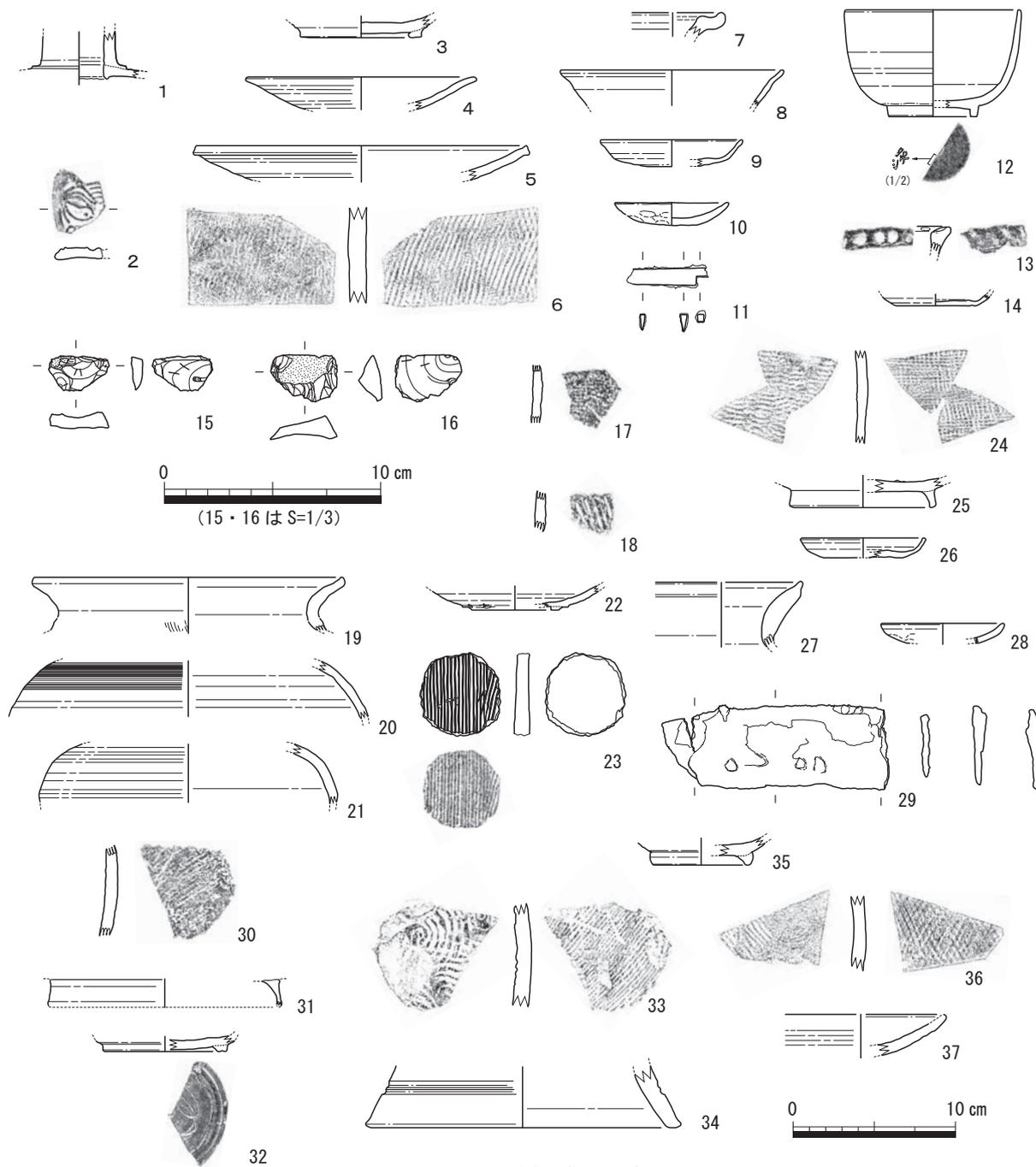


図8 出土遺物 (S=1/4)



写真14 出土遺物 1

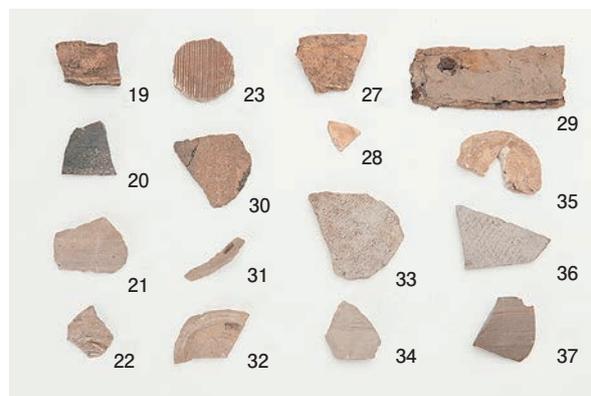


写真15 出土遺物 2

2 第2次範囲確認調査 —各トレンチの様相と出土遺物—

試掘坑の設定 第2次調査における試掘坑は、第1次調査で明らかにし得なかった課題解決のために、北トレンチの延長で石室奥壁の背後にAトレンチ、東トレンチの延長にBトレンチ、羨道部拡張区の東西の延長にそれぞれCとEトレンチ、南トレンチの東側にDトレンチ、前面の南西コーナー部にそれぞれFとGトレンチを設定した。

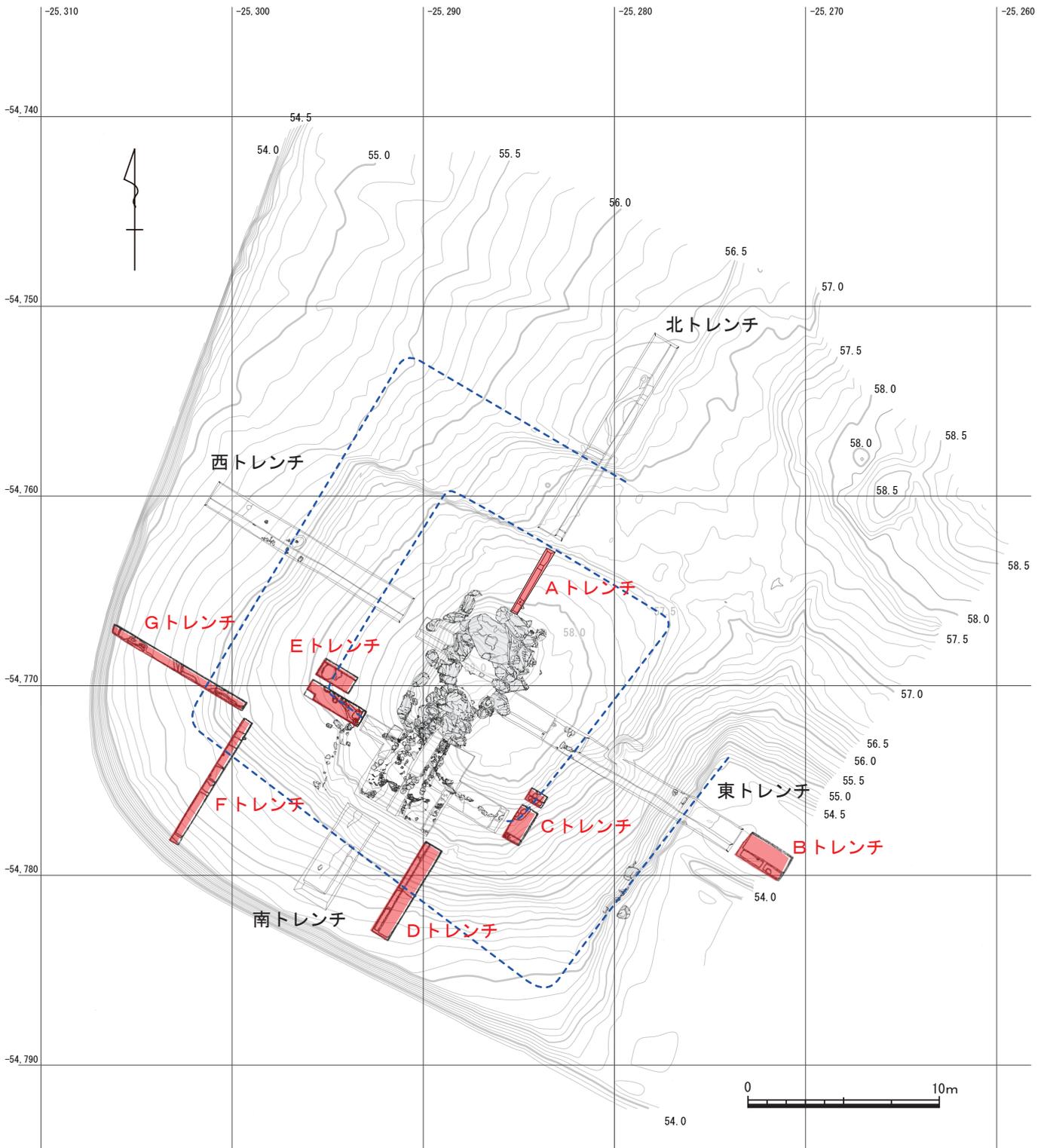


図9 試掘坑配置図 (S=1/300)

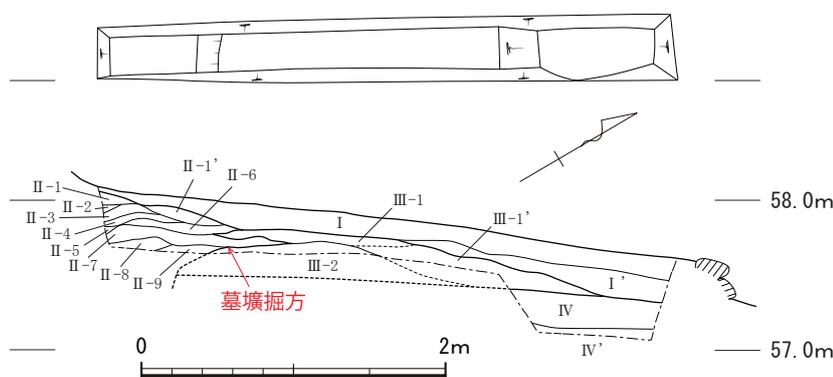
各トレンチの様相

Aトレンチ 第1次調査の北トレンチの延長で、西壁を玄室主軸に沿わせて設けた幅34~44cm、長さ3.8mの試掘坑である。

黄色系と黒色系の土を互層状に石室側へ盛り上げた、石室上部の構築に関わるⅡ層と石室下半を収めるために掘られた墓壇の下がり端を鏡石(奥壁下部の巨石)の内側から1.4mの位置(標高は約57.8m)で確認した。発掘を停止した深さまでは石室に向かって緩やかに下がるが、その先は垂直に掘られ石材の背後には50cm前後の間隙(作業坑)が確保されていたと考えられる。

Ⅲ層は墳丘築成に関わる盛土であり、Ⅲ-2は墓壇掘削時に排出された地山が周囲にならされたと思われる最も初期の盛土である。Ⅱ層とⅢ層の境目では、石室側(Ⅱ)からと墳丘側(Ⅲ)からの盛土が交互に噛み合う現象(Ⅱ-6とⅡ-7の間にⅢ-1が、Ⅲ-1とⅢ-2の間にⅡ-7)が見られ、石室構築に関わる工程と墳丘盛土が同時並行で行われたことがわかる。

これより上部の盛土は既に失われており、残念ながら2段目に関する情報は得られなかった。



表土

- I 竹の根の蔓延が著しい表土。茶褐色で北へ行くほど黒みを増す。
- I' 暗褐色砂質土 締まり弱。

石室構築関連

- Ⅱ-1 黄橙色砂質土に地山(岩盤)由来のφ1~3cmの腐れ礫が多く混入する。締まり強。(黄色系)
※墓壇内の掘削時に排出された地山。
-1' -1に淡褐色砂質土が混じる。
- Ⅱ-2 黒褐色やや粘質土 比較的均質で締まり弱。(黒色系)
- Ⅱ-3 暗褐色土に地山由来の砂礫が混ざり、斑模様を呈する。締まりやや強。(黄色系)
- Ⅱ-4 茶褐色土に1と同じように礫が混じる。(黄色系)
- Ⅱ-5 暗褐色土に地山由来のφ1~2mmの粒が少し混じる。(黒色系)
- Ⅱ-6 地山由来の黄色土(礫はやや小粒のφ1~2mm)に茶褐色砂質土が少し混じる。(黄色系)
- Ⅱ-7 茶褐色やや砂質土 締まりは中程度。(黒色系)
- Ⅱ-8 -7に似るが黄橙色が強く、地山に近い土。(黄色系)
- Ⅱ-9 黒褐色土 茶褐色砂質土が疎だが均一に混じる。(黒色系)

墳丘築成関連

- Ⅲ-1 黄褐色土に地山由来の礫が混じる。締まり強。
-1' 黄褐色やや砂質土 下へ行くほど締まり弱。
- Ⅲ-2 黄褐色土 地山由来の土。混入する砂粒はφ1~3mmで大きめ。
※墓壇内の掘削時に排出された地山が旧表土上にならされた初期の盛土。

旧表土(地山)

- IV 黒褐色砂質土 締まり弱。
※「旧表土」とするには厚みがあり、圧縮された、いわゆるブラックバンドとは言い難い。墓壇を掘削した範囲の表土が乗っている可能性もある。
- IV' 均質な粘質黄色土(地山)

図10 Aトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

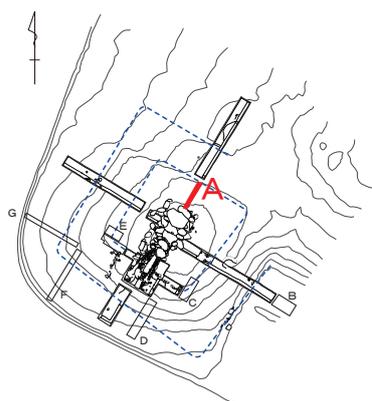


写真16 Aトレンチ 北から



写真17 墓壇

Bトレンチ 第1次調査の東トレンチの延長に設けた幅1.5m、長さ2.7mの試掘坑である。第1次調査で「溝か」(SD11、f・g)とされた層が、この東側で立ち上がり、溝状の窪みを呈するか否かを

確認することが目的である。

層序は、I層 表土、II層 自然流土及び堆積土、IV層 地山である。III層の墳丘盛土は見られない。

II層のうち、II-1~3までは褐色土で、墳丘の流出土と思われる。II-4~7までは暗~黒褐色土で、第1次調査のf・g層に当たる。これらの層はIV層(地山)の傾斜に沿って沈み込んでおり、トレンチの範囲内においては立ち上がらなかった。よって自然に形成された堆積土とみるのが妥当であり、墳丘の東側には溝は存在しないと判断した。

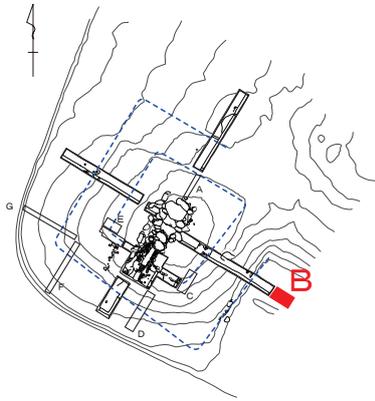
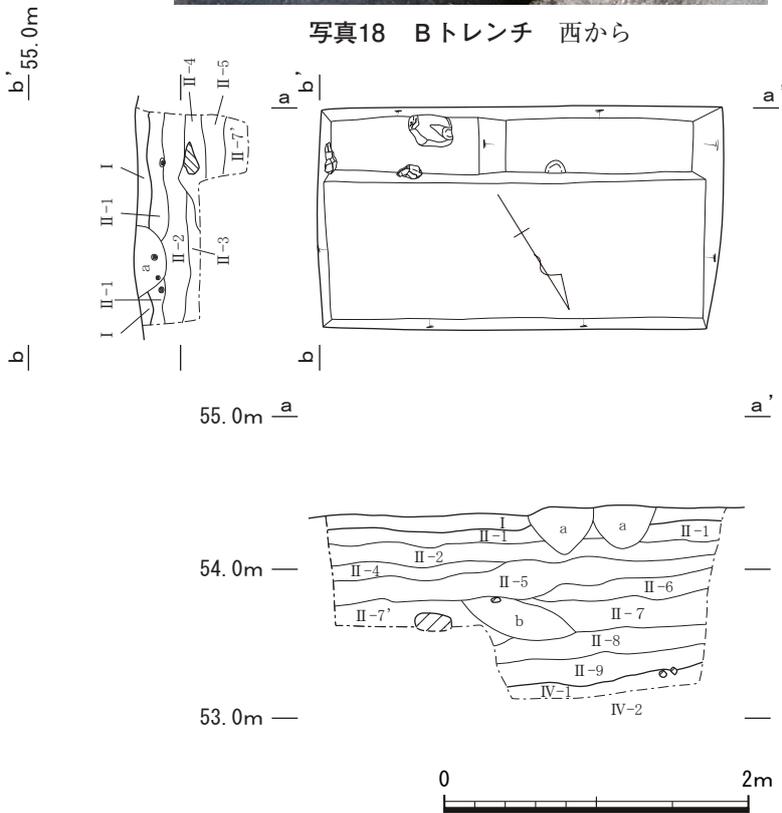


写真18 Bトレンチ 西から



表土

- I 表土
- a 竹の根
暗褐色砂質土 粘性低く、締まり悪い。

自然流土・堆積土

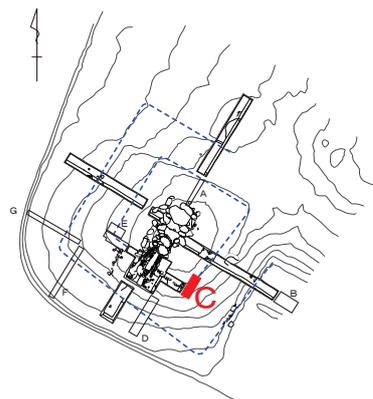
- II-1 暗褐色砂質土 aより明るい。
粘性低く、締まりやや悪い。
- II-2 暗赤褐色砂質土
粘性低く、締まりやや悪い。
- II-3 暗褐色砂質シルト
粘性低く、締まり良い。
- II-4 淡黒褐色砂質シルト
粘性低く、締まり悪い。
砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- II-5 黒褐色砂質シルト(第1次 f層)
粘性低く、締まり悪い。砂を多く含む。
- II-6 暗褐色砂質シルト(第1次 g層)
粘性やや高く、締まり悪い。
砂とφ~10mmの礫を多く含む。
- b 暗褐色砂質シルト 6に似る。
竹の根による攪乱。
粘性やや高く、締まり悪い。
- II-7 暗褐色シルト(第1次 g層)
-6より明るい。
粘性やや高く、締まり悪い。
- II-7' 暗褐色シルト(第1次 g層)
粘性高く、締まり良い。
川原石少量含む。
- II-8 淡黒褐色シルト(第1次 23層)
粘性高く、締まり良い。
砂とφ~10mmの礫を多く含む。
- II-9 明褐色シルト(第1次 23層)
粘性高く、締まり良い。
地山由来の土と亜角礫を少量含む。

旧表土(地山)

- IV-1 暗橙褐色シルト(漸移層 第1次 24層)
粘性高く、締まり良い。
亜角礫を多く含む。漸移層。
- IV-2 暗橙色シルト(第1次 28-2層)
粘性高く、締まり良い。

図11 Bトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

Cトレンチ 第1次調査の羨道部拡張区の東側に設けた長さ3.0m、幅1.0mのトレンチである。トレンチ内に土層確認のための幅30cmのベルトを残した。第1次調査で確認された羨道部壁体の途中から東西に分かれて延びる石列の東延長の確認が目的である。



層序は、Ⅰ層 表土、Ⅲ層 墳丘盛土、Ⅳ層 地山である。Ⅱ層の墳丘流出土は見られない。

表土の下部に当たるⅠ-2とⅠ-3については盛土が土壌化した可能性がある。

地山(Ⅳ-4)は黄白～黄橙色を呈するチャートの岩盤であるが、表面は岩盤が風化した黄褐色土や砂礫層(Ⅳ-1～3)が10cmほど堆積する。

Ⅲ層の最下部Ⅲ-9・10・16は、地山風化層Ⅳ-1～3由来の土や砂礫は見られず、上層の盛土に含まれる褐色土がブロックで混ざるため、墓壇掘削範囲の旧表土が混入している可能性がある。

これより上部は灰～黒褐色を呈する盛土の間に、地山由来の黄色土(Ⅲ-3・8)が挟まっており、Aトレンチと同様に、石室構築と墳丘盛土の工程が同時に進行したことを物語る。

盛土最上面で暗～黒褐色を呈するⅢ-1・4(平面図網掛部分)の外縁がトレンチ内で矩形を呈していることが確認され、この現象が方墳であることを証すとともに、2段目の南東角部を示すと判断した。また、その形に沿って長径30～40cm、短径20cmほどのピット列が検出された。この列は、第1次調査で検出された石室羨道部壁体から連続して東に延びる石列(図6)につながり、東トレンチで見られた初期の盛土の流出を抑えていた川原石(図5)^{*1}の方向に延びている。これらと同様の機能を持っていた石が抜き取られた痕跡である可能性が高い。すなわち、盛土の流出を抑える役割を持ち、少なくとも前面においては表面に面を出して2段目の端部を際立たせていたと考えられる。

なお、トレンチ南端のⅢ-14から縄文土器と思われる小片が出土した。



写真19 Cトレンチ 東から



写真20 断面a-a'

*1 東トレンチで見られたこれらの石は、完全に盛土に覆われていた。Ⅱ墳丘 1 第1次範囲確認調査「図5」p.10

表土

- I-1 表土
- I-2 淡黒褐色砂質シルト 粘性高く、締まり良い。
- I-3 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まりやや悪い。
- a 暗褐色砂質土 竹の根 粘性低く、締まり悪い。
- b 黒褐色砂質シルト 石の抜き取り痕か。粘性低く、締まり悪い。
- c 黒褐色シルト 砂を多く含む。石の抜け跡。粘性低く、締まり悪い。

盛土

- III-1 暗褐色シルト 粘性高く、締まり良い。黒色土ブロックが多く入る。
- III-2 灰褐色シルト 粘性高く、締まり良い。黒色土ブロックが少し入る。
- III-3 暗赤橙色シルト 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。墓壇掘削土か(AトレンチのIII-2に相当)。
- III-4 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まりやや悪い。褐色土ブロックが少し入る。
- III-5 暗褐色シルト 粘性やや高く、締まりやや悪い。
- III-6 暗褐色シルト 粘性やや高く、締まりやや悪い。-5に地山由来の黄橙色土が少し入る。
- III-7 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まり良い。
- III-8 明黄橙色シルト 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。旧表土の可能性もある。墓壇掘削土か(AトレンチのIII-2に相当)。
- III-9 暗灰褐色砂質シルト 粘性低く、締まりやや悪い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- III-10 灰褐色砂質シルト 粘性低く、締まりやや悪い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- III-11 暗褐色シルト 粘性高く、締まり良い。黒色土ブロックが多く入る。
- III-12 黒褐色シルト 粘性高く、締まりやや悪い。-5.6より暗い色調。
- III-13 明灰褐色シルト 粘性高く、締まり良い。黒色土ブロックが多く入る。
- III-14 淡黒褐色シルト 粘性低く、締まりやや悪い。褐色土ブロックが少し入る。
- III-15 暗褐色砂質シルト 粘性低く、締まりやや悪い。砂とφ~10mmの礫を少し含む。
- III-16 淡黒色砂質シルト 粘性低く、締まりやや悪い。砂とφ~10mmの礫を多く含む。褐色土ブロックが多く入る。
- III-17 灰褐色シルト 粘性低く、締まりやや悪い。褐色土ブロックが少し入る。

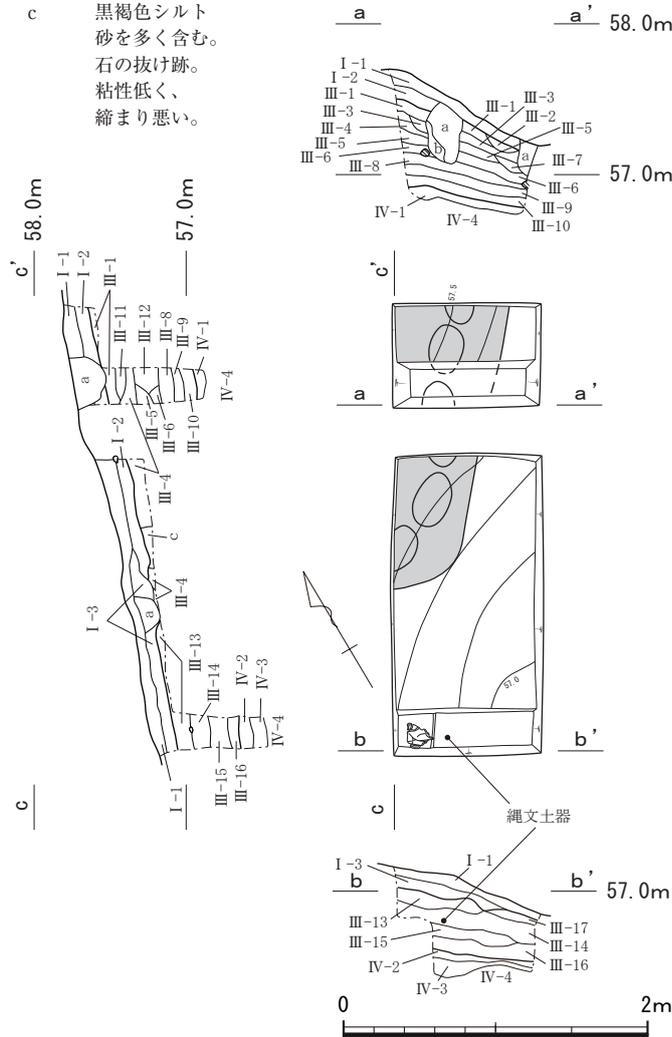
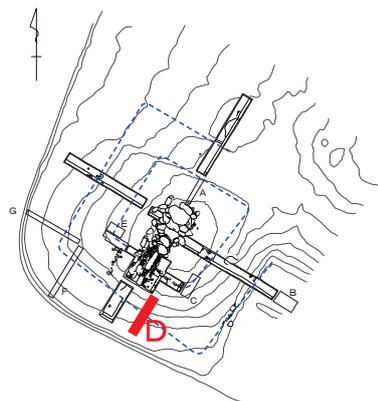


図12 Cトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

地山

- IV-1 灰黄褐色砂礫土 粘性低く、締まり悪い。砂と亜角礫を多く含む。
- IV-2 暗灰黄褐色砂礫土 粘性高く、締まり良い。砂と亜角礫を多く含む。
- IV-3 黄橙色シルト 粘性高く、締まり良い。砂と亜角礫を多く含む。
- IV-4 黄白色~黄橙色チャート岩盤

Dトレンチ 墳丘正面で、石室主軸と平行に、その東側に設けた長さ5.5m、幅1.0mのトレンチである。第1次調査では確認できなかった墳丘前面における墳端の確認が目的である。

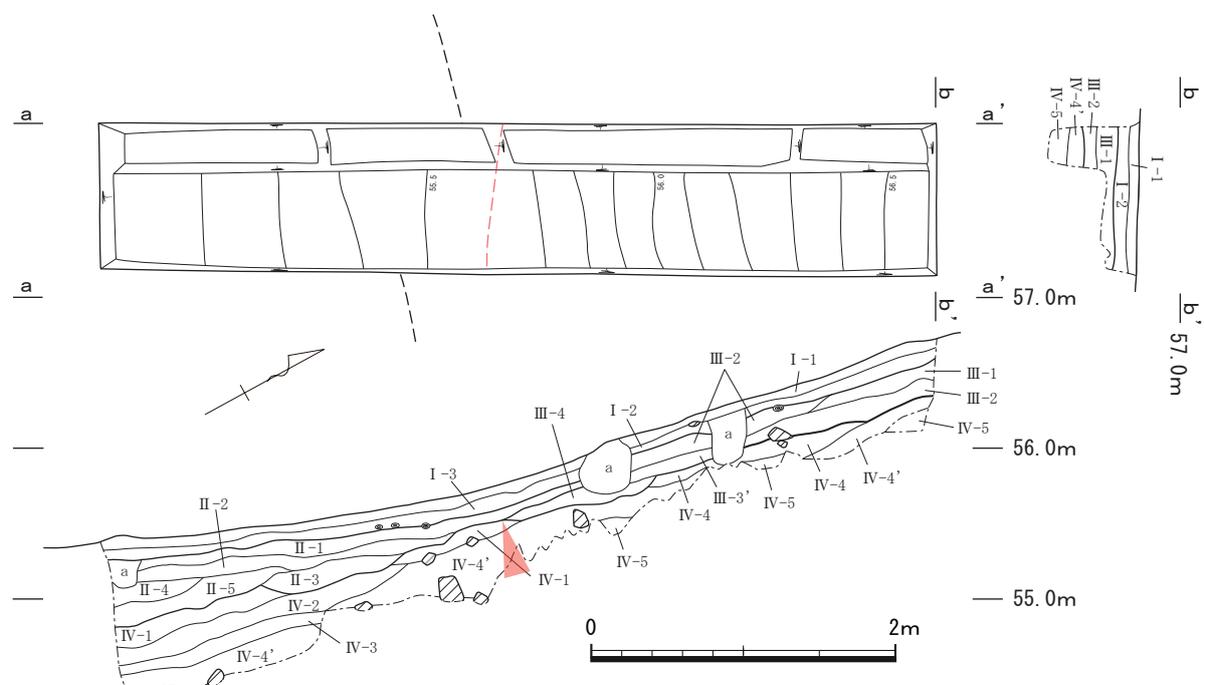


層序は、I層 表土、II層 墳丘流出土、III層 墳丘盛土、IV層 地山である。

地山はCトレンチと同様に、黄白~黄橙色を呈するチャートの岩盤であるが、地表面に近い部分は風化が著しく、拳大の角礫を含む砂礫層IV-4・4'が岩盤の上に平均して20cmほどの厚さで堆積している。

墳丘から離れたトレンチの南側は、自然堆積と思われるIV-2~3及び墳丘流出土II-1~5が地山風化層の傾斜に沿って堆積している。

墳丘側のトレンチ北側には、墳丘盛土と考えられる暗~黒褐色のIII-1~4が堆積している。これらの層には密度に差こそあれ一様に褐色土が混ざり、II層とは明らかに区別することができた。したがって、III層が尽きる地点を墳端の候補(▲)とした。



表土

- I-1 表土
- I-2 暗褐色シルト 粘性低く、締まり良い。腐葉土。
- I-3 暗褐色シルト 砂とφ1~5mmの礫を多く含む。
- a 暗灰褐色砂質土 竹の根

流土

- II-1 暗褐色シルト 粘性やや高く、締まり良い。
- II-2 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まり良い。
- II-3 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まり良い。
- II-4 暗褐色砂質シルト 粘性低く、締まり悪い。
- II-5 淡褐色砂質シルト 粘性低く、締まり悪い。

盛土

- III-1 黒褐色粘質砂礫土 粘性やや高く、締まり良い。砂とφ1~5mmの礫を多く含む。φ1~5cmの角礫やや多く含む。褐色土の斑が少し入る。
- III-2 暗褐色シルト 粘性やや高く、締まり良い。
- III-3 淡黒褐色粘質砂礫土 粘性やや高く、締まりやや悪い。砂とφ1~5mmの礫を多く含む。地山由来の礫が多く、やや褐色がかかる。
- III-3' 黒褐色シルト 粘性低く、締まりやや悪い。褐色土が多く混じる。
- III-4 淡黒褐色シルト 粘性低く、締まりやや悪い。褐色土が多く混じる。

地山

- IV-1 暗褐色砂礫土 粘性低く、締まり悪い。地山岩盤のくされ礫が多く混じる。
- IV-2 暗褐色シルト 粘性やや高く、締まりやや良い。砂とφ1~5mmの礫を多く含む。φ1~10cmの礫が少し入る。-3の砂がブロックで少し入る。
- IV-3 暗褐色砂礫土 粘性高く、締まりやや良い。地山岩盤のくされ礫が多く入る。
- IV-4 灰褐色~暗褐色砂礫土 粘性低く、締まり悪い。地山岩盤の風化。
- IV-4' 灰褐色~黄褐色砂質シルト 粘性やや高く、締まり良い。地山岩盤の風化。
- IV-5 黄白色~黄褐色チャート岩盤

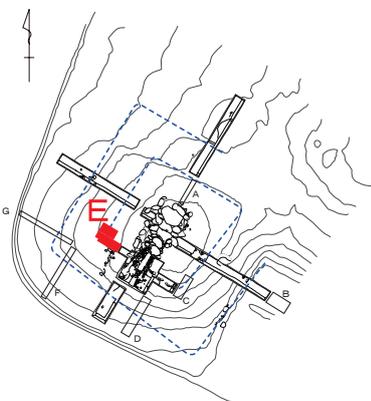


写真21 Dトレンチ 東から

図13 Dトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

Eトレンチ 第1次調査の羨道部拡張区の西側に、幅1.0m、長さ3.3mと、土層観察のために30cm離して北側に幅1.0m、長さ2.0mのトレンチを沿わせ、L字形に設けたトレンチである。第1次調査で確認された羨道部壁体の途中から東西に分かれて延びる石列の西延長の確認が目的である。

層序はDトレンチと同様に、Ⅰ層 表土、Ⅱ層 墳丘流出土、Ⅲ層 盛土、Ⅳ層 地山である。



地山は岩盤ではなく、黄褐色～黄橙色土ないし砂礫層であり、部分的に赤橙色化している。

トレンチの西側では地山の上にⅡ層が堆積する。墳丘の西側斜面はかつて畑として利用されており、この層はその時の耕作土と思われる。

盛土としたⅢ層は石室寄りの東側にのみ残存していた。最下部のⅢ-5～7は、Cトレンチで見たⅢ-9・10・16と同じ性質を持つ。これらの層の上には灰～暗褐色を呈する盛土が確認でき、東端部では墓壇掘削時に排出されたとされる地山由来の黄色土Ⅲ-1が僅かに確認できた。

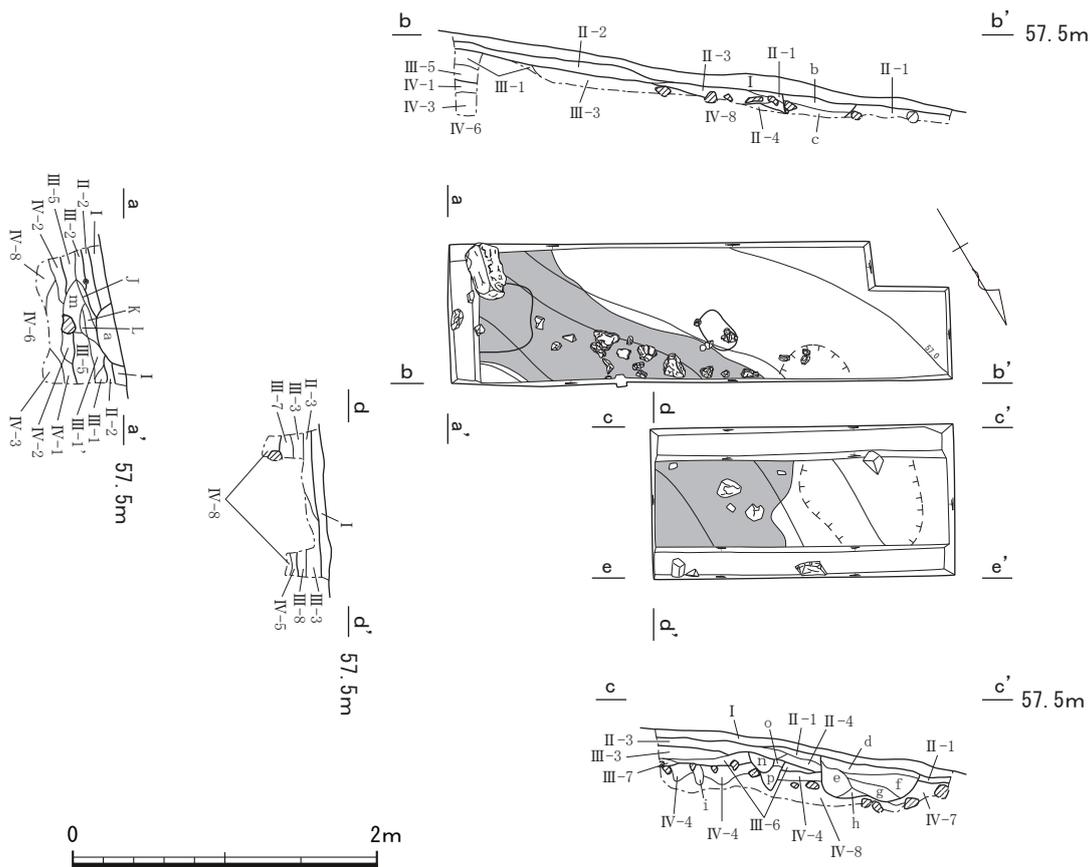
ここでも、Cトレンチのように明瞭な角を成さないが、灰～暗褐色を呈するⅢ-3(平面図網掛部分)が屈曲して西辺に回り込む様子が確認された。したがって、この部分が墳丘2段目の南西角部であると判断した。また、トレンチの東端部では第1次調査で検出された石室羨道部壁体から連続して西に延びる石材及びその抜け跡の延長と思われるピットを検出した。ただし、西辺に回り込むような連続したピット列にはならず、代わりに径20cm未満の小さな自然石が、散漫ではあるが、この層の上面で列を成しているように見えた。盛土の初期段階において意図的に据えられたものであれば、或いは盛土の目印のような役割を持っていた可能性もあると考えられる。トレンチ内においては、これより上方の盛土が失われているため混入時期を確かめる術はない。再調査の機会を得ることができれば、他の場所で検証を心掛けたい。



写真22 Eトレンチ



写真23 石の抜け跡



表土

I 暗褐色砂質土

流土か

- II-1 淡褐色砂質土 粘性低く、締まり悪い。
- II-2 暗褐色シルト 粘性高く、締まり良い。
- II-3 黒褐色シルト 粘性やや低く、締まりやや悪い。
- II-4 暗褐色シルト 粘性高く、締まり良い。
- II-5 淡黒褐色シルト 粘性高く、締まり悪い。
- II-6 灰黄褐色シルト 粘性低く、締まり良い。砂とφ~10mmの礫を多く含む、地山由来の黄色土のブロックが入る。

盛土

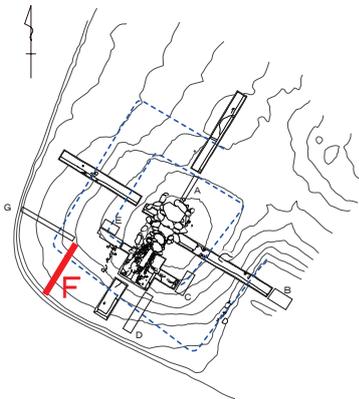
- III-1 黄橙色シルト 粘性やや高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。墓塚掘削土か(AトレンチのIII-2に相当)。
- III-1' 暗黄褐色シルト 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- III-2 暗褐色シルト 粘性低く、締まり悪い。III-1と同じ層か。
- III-3 暗灰褐色シルト 粘性高く、締まり良い。竹根が蔓延。
- III-4 淡灰褐色シルト 粘性低く、締まりやや悪い。砂とφ~5mmの礫をやや多く含む。
- III-5 黒褐色シルト 粘性やや高く、締まり良い。
- III-6 淡黒褐色シルト 粘性やや高く、締まりやや悪い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- III-7 淡黒褐色シルト 粘性やや高く、締まり良い。
- III-8 暗灰褐色シルト 粘性やや高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。地山の黄色土を含み、漸移層の可能性ある。

地山

- IV-1 暗灰褐色シルト 粘性やや高く、締まりやや悪い。III-5がブロックで入る。漸移層か。
- IV-2 灰褐色シルト 粘性低く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。地山由来の黄色土ブロックが多く入る。漸移層。
- IV-3 暗赤橙色シルト 粘性やや高く、締まりやや悪い。漸移層。
- IV-4 暗黄橙色シルト 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。地山由来の黄色土を多く含む。漸移層。
- IV-5 暗黄褐色シルト 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。地山由来の黄色土を多く含む。漸移層。
- IV-6 赤橙色砂礫土 粘性やや高く、締まりやや悪い。いわゆる地山。
- IV-7 暗黄橙色砂礫土 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む、φ10cmの礫をやや多く含む。いわゆる地山。
- IV-8 明黄褐色砂礫土 粘性高く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む、φ10cmの礫をやや多く含む。いわゆる地山。
- IV-8' 暗黄褐色砂礫土 粘性低く、締まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む、φ10cmの礫をやや多く含む。いわゆる地山。
- a~q 攪乱 主に竹の根によるもの。総じて粘性が低く、締まりが悪い。

図14 Eトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

Fトレンチ 墳丘南西角部の確認のために、墳丘前面の西端に設けた長さ7.1m、幅0.5mのトレンチである。



層序はDトレンチと同様に、I層 表土、II層 墳丘流出土、III層 盛土か、IV層 地山である。

地山の堆積状況は岩盤IV-10と地山風化土IV-2~9の上に、トレンチ南側では堆積土IV-1が厚く堆積している。

現況の傾斜が緩やかであるため、II層がトレンチ全域で堆積している点でDトレンチとは異なる。なお、Eトレンチと同様にII-1・2・5については畑であったところに耕耘が及んだ可能性がある。

トレンチの北側では、II層の下に中世以降に穿たれた土坑があり、わずかに認識できたIII層をその性質と堆積状況のみから「盛土」とするには躊躇される。したがって、墳端を盛土の残存状況から判断することは困難であり、ここでは暫定的にIII層の外側で、地山のIV層の傾斜が水平に変換する地点(現況の見かけの墳端ラインとほぼ一致する)を墳端の候補とした。

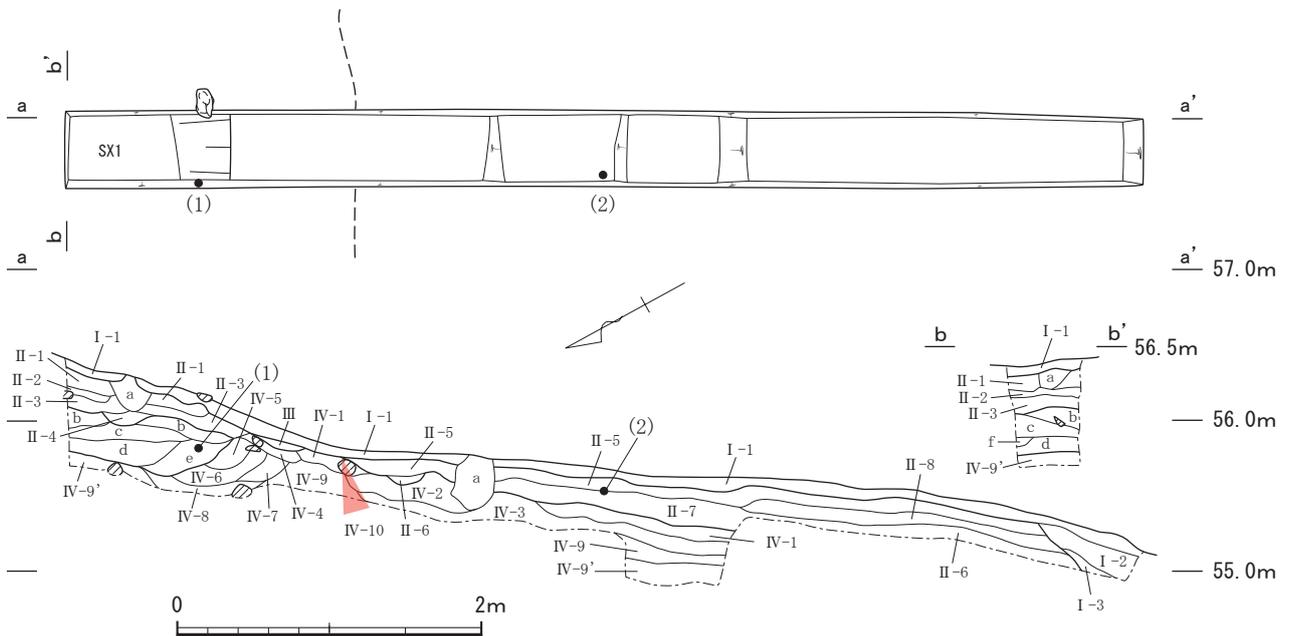
なお、II層から灰釉陶器片(2)、土坑(SX1)内からは須恵器(1)・近世陶器片(3)が出土した(図17、写真27)。



写真24 Fトレンチ



写真25 流土・地山(岩盤)



表土

- I-1 表土
- I-2 淡褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。
- I-3 淡褐色砂質シルト 粘性低く、縮まり悪い。
- a 暗褐色砂質土 攪乱(竹根)

流土

- II-1 暗褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。
- II-2 暗褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。II-1より明るい色調。
- II-3 暗赤褐色シルト 粘性やや低く、縮まりやや悪い。φ~5mmの礫を多く含む。II-2と同じ層か。
- II-4 赤橙色シルト 粘性高く、縮まり良い。地山由来の黄褐色土ブロックが入る。
- II-5 暗褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。
- II-6 黒褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。
- II-7 暗灰褐色シルト 粘性低く、縮まりやや悪い。
- II-8 暗褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。砂とφ~5mmの礫を多く含む。II-5より暗い色調。

盛土か

- III 暗褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。地山由来の黄色土ブロックが多く入る。流土の可能性あり。

地山

- IV-1 暗黄褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。φ~5mmの礫を多く含む。自然流土。
- IV-2 暗褐色砂礫土 粘性高く、縮まり良い。砂とφ~10cmの礫を多く含む。地山の風化土。
- IV-3 灰褐色砂礫土 /
- IV-4 赤褐色砂礫土 粘性低く、縮まり悪い。地山の風化土。
- IV-5 暗赤褐色砂礫土 / 砂とφ~5mmの礫を多く含む。地山の風化土。
- IV-6 暗赤褐色砂礫土 / 砂とφ~10cmの礫を多く含む。地山の風化土。
- IV-7 赤橙色砂礫土 / 地山の風化土。
- IV-8 暗赤褐色シルト 粘性高く、縮まり良い。地山の風化土。
- IV-9 暗黄~灰褐色砂礫土 粘性低く、縮まり悪い。砂とφ~10cmの礫を多く含む。地山の風化土。漸移層。
- IV-9' 灰黄~暗黄褐色砂礫土 /
- IV-10 黄白~黄褐色チャート岩盤 いわゆる地山。

土坑

- b 赤褐色砂質土 粘性低く、縮まりやや悪い。
- c 黒褐色砂質土 / bがブロックで入る。
- d 黒褐色砂質土 / cより暗い色調。
- e 淡黒褐色砂質土 / IV-3~6が混じり、やや赤みがかかる。
- f 淡黒褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。

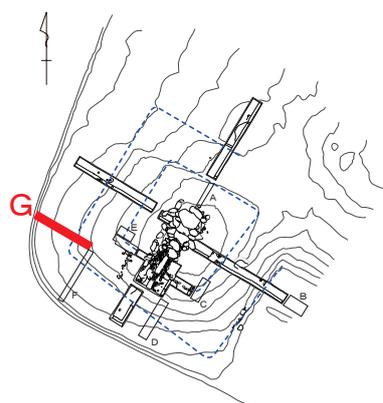
図15 Fトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

Gトレンチ 墳丘南西角部の確認のために墳丘西辺の南端に、Fトレンチと直角に方向を違えて設けた長さ8.0m、幅0.5mのトレンチである。

層序は、I層 表土、II層 墳丘流出土、IV層 地山である。III層の盛土は見られない。

地山はB・D・Fトレンチと同様に、灰白~黄褐色を呈するチャートの岩盤の上に、それが風化した砂質土(IV-1)と砂礫層(IV-2~3)が10~20cmほど堆積する。

他のトレンチに比べて地山と表土の間に堆積する土が薄く、土層の峻別が困難であり、墳丘流出土としたII層の内、表土の下に堆積するII-2~3は耕作土か流土(古墳築造以前の自然流出土の可能性もある)か判断できなかった。II-4~9は、調査序盤において、石室側に積み重なるように堆積している形が一見「盛土か」と思われたが、最下層のII-8~9がFトレンチから続く土坑(SX1、近世陶器が出土した)の覆土である可能性があり、さらにそれを覆うII-5とII-7の境目からは灰釉系陶器(4)が出土した(図17、写真27)。



築造時に混入したものではないことは明らかである。したがって、II-4~7'は、一度攪乱を受けた盛土の2次堆積であると判断できた。

地山(IV層)は非常に緩やかで、特に墳丘側は水平に近い。或いは、後世の削平が地山にまで及んでいる可能性もある。そこへ再び石室側から流出した土(II層)が堆積した状況であり、残念ながらトレンチ内においては盛土(III層)と認定できる土層は確認できなかった。

墳端を想定できる要素はGトレンチの範囲内では無く、現況の見かけの墳端(▲)は流土の端であることが判った。墳丘西側の外部構造に関しては更なる検討が必要である。

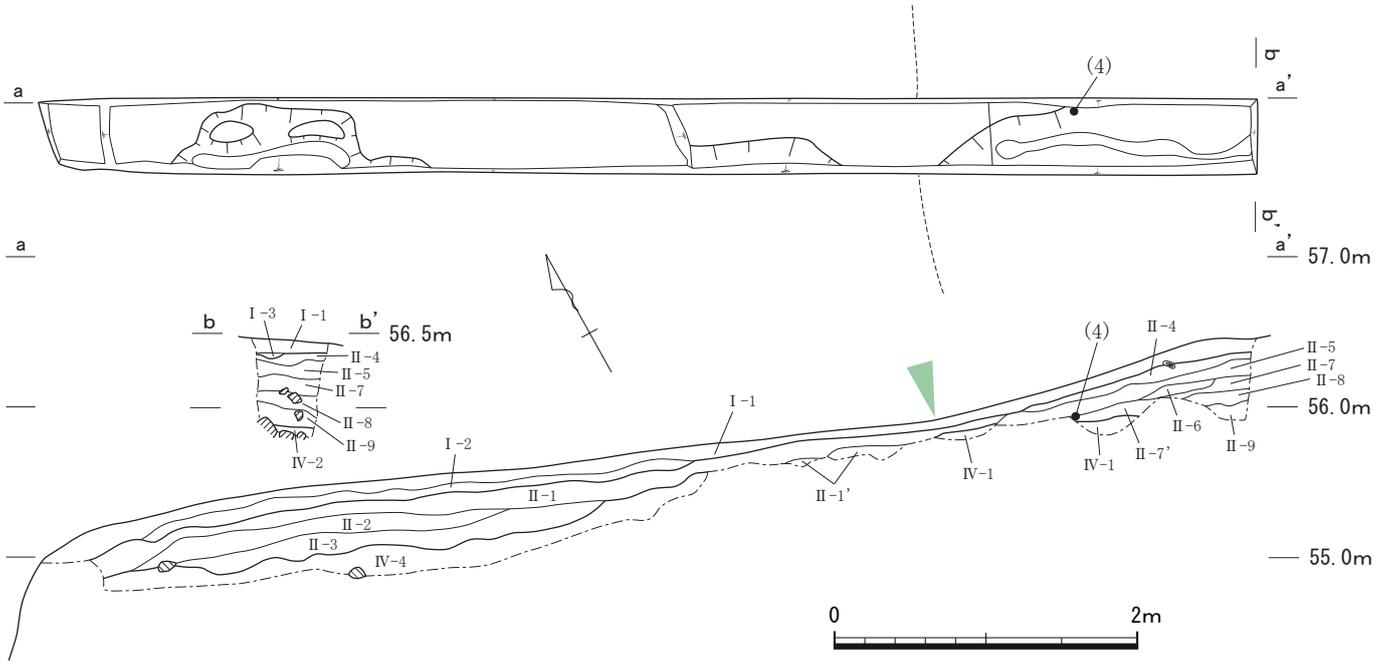


写真26 Gトレンチ 西から

表土

- I-1 表土
- I-2 淡褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。砂を多く含む。現代のゴミを含む。
- I-3 暗褐色砂質土 縮まり良い。竹根が蔓延する。

流土

- II-1 暗褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。砂とφ~5mmの礫をやや多く含む。II-5がブロックで入る。
- II-1' 暗黄褐色砂礫土 粘性低く、縮まり悪い。地山岩盤の風化土を多く含む。竹根の影響を受ける。
- II-2 淡褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。砂とφ~3cmの礫をやや多く含む。
- II-3 明褐色砂質土 地山岩盤の風化土を多く含む。
- II-4 淡黒褐色砂質土 土壌化が進んでいる。
- II-5 黒褐色砂質土 粘性やや高く、縮まり悪い。砂とφ~5mmの礫をやや多く含む。
- II-6 黒褐色シルト 粘性高く、II-5より暗い色調。
- II-7 暗灰褐色シルト 粘性やや高く、縮まり悪い。黄色土ブロックが入る。
- II-7' 灰褐色砂質土 粘性低く、縮まり良い。
- II-8 黒褐色シルト 粘性やや高く、縮まり良い。地山風化礫を含まない。SX1の覆土か。
- II-9 淡黒褐色シルト 縮まり良い。

地山

- IV-1 灰~黄褐色砂質土 粘性低く、縮まり悪い。砂とφ~10mmの礫を多く含む。
- IV-2 暗褐色砂礫土
- IV-3 灰白~黄褐色チャート岩盤 いわゆる地山
- IV-4 灰黄色砂礫土 粘性低く、縮まり悪い。地山風化土。

図16 Gトレンチ 平・断面図 (S=1/50)

出土遺物 (1)は、須恵器の瓶類の口縁部。胴部接合面から緩やかに外反して立ち上がり、口縁付近で内湾する。器壁は7mmと薄く、中央下寄りに沈線が1条めぐる^{*1}。(2)は、灰釉陶器の碗の口縁部。胴部は丸みを持ち、口縁端部は緩く外反する。K-90段階のものか。(3)は、近世陶器の蓋。胎土は橙色で、内外面に灰釉が施され黄灰色に発色している。(4)は、灰釉系陶器の底部。糸切り痕が残り、断面三角形の高台が貼り付けられている。灰釉陶器の最終末期に位置する百代寺段階の、いわゆる灰釉山茶碗か山茶碗3型式に比定される。

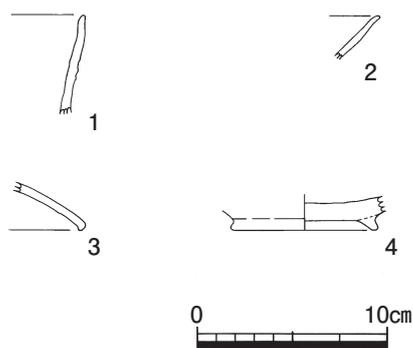


図17 出土遺物 (S=1/4)



写真27 出土遺物

表2 出土遺物

| 番号 | 種別 | 器種 | 部位 | 出土遺構 | 残存 | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 | 備考 |
|----|-------|----|-----|-----------|------------------|----|------|----|-------|---------|
| 1 | 須恵器 | 瓶類 | 頸部 | Fトレンチ SX1 | 小片 | 良好 | 灰白色 | 並 | ロクロナデ | 自然釉 |
| 2 | 灰釉陶器 | 碗 | 口縁部 | Fトレンチ II層 | 小片 | 良好 | 暗灰色 | 並 | ロクロナデ | |
| 3 | 近世陶器 | 蓋 | 口縁部 | Fトレンチ SX1 | 小片 | 良好 | 橙色 | 並 | ロクロナデ | 内外面に灰釉 |
| 4 | 灰釉系陶器 | 碗 | 底部 | Gトレンチ II層 | 底部 $\frac{1}{3}$ | 良好 | 淡黄灰色 | 並 | ロクロナデ | 糸切り痕を残す |

墳形と規模 墳丘を画す基底石や葺石の発見が期待されたが、残念ながら墳端を示す遺構は発見されず、封土の大部分が失われていた。墳丘は、南西に延びる池尻山の支尾根の先端の形を活かし、地山の部分的な削り出しと、地形に応じた盛土が施された不安定な構造が推測できる。また、その規模は、前面の幅約24m、西側面の幅約22m(推定)の不整形な方形であり、北西部は丘尾から完全には切り離されず、角部を持たないと考えられる^{*2}。

羨道部の中ほどから連続して左右(東西)に延びる石列ないし、その抜け跡と思われるピット列を検出したことにより、それらが2段目の前面基底部に沿って列を成し、角を持って側面に回り込む様子を捉えることができた。2段目の前面の幅は12.0m(角部が丸いため、最大幅を採ると12.5m)を測る。ただし、この遺構は前面のみに見られるもので、全周していない。

*1 塚原1号古墳に類似する提瓶の副葬品が知られている。関市教育委員会 1989『塚原遺跡・塚原古墳群』

*2 V今後の課題 2石室と墳丘 p.68